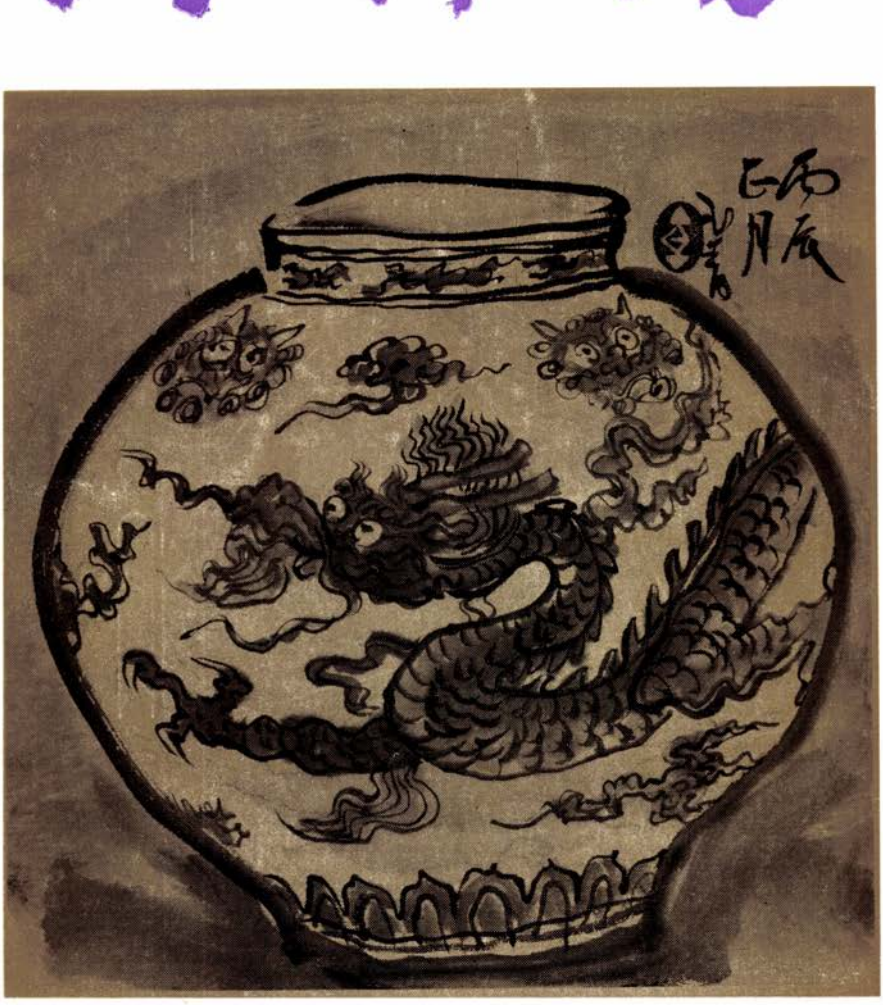
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十年十二月二十五日　印刷
昭和五十一年一月一日発行　（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五八四号



日川協加盟

No. 584

川柳ゆーもあ特集

一月号

「旅人」以後の

麻生路郎作品（32）

（傍島　静馬）

三十八年一月号

不朽洞句帖

世紀をジャンプして生きんとす

アイデアを売る男なり　長屋に居

社会のふき溜りに生きる古銭にて

架空の乙女を抱いて死を待つか

にふぐ鯛　父の回顧は尽きぬなり

南海電鉄川柳会「忘れ物」

も少しで放るとこ粗末な忘れ物

大阪逓信病院川柳会「酒」

おじぎばかりしていて飲んだ酒の味

南海沿線の―



初詣

住吉大社
水間観音
高野山

お問合せは
南海国際旅行

南海電鉄

■なんば641-8686
■梅田311-5038■天王寺623-1641

おらが春　襟を正して屠蘇の味

京都顔見世
獅子の座へ芽出度くなおる大薩摩

寺小屋に持つべきものは子でござる

引窓があけば与平の義理はすみ

妖しとも如月姫の布ざらし

中島生々庵

たつどし

年末は忙しいもの、騒々しいものと相場はきまっているが、50年の歳末は格別だったようだ。国鉄ストもさることながら、東京の義兄の長逝、川柳人協会からの招聘、その頃からスケジュウルがつまり出し、日川協総会が12月7日、ロータリーのフォーラムや家族会、学会の出席、本社の歳末句会、大学同期生総会の世話、だんだん追い込まれてゆくさなかの11日には、東京の次男のとこで二人目の孫が生れる騒ぎ。それでも何んとか、かんとか、ねむたい眼をこすりながら新歌舞伎座の山本富士子、京都の顔見世等々自分でもあきれる程うまく時間の都合が出来るものだ。その上本職の医業の方は風邪がはやって診察室をカキ立てるから、疲れの出るひまもないと諦める外はない。今日の新聞に、遂に消えゆく栄光の蒸気機関車SLと大きな記事。なんとしても去るものは寂しいが、これから迎える辰にはいろいろあって、昇天しない竜を蟠竜というそうだが、やはり寸にして天に昇るの気がある竜であってほしい。

川柳塔新年号

座右の句
ふるくとも僕には仁義礼智信　（路　郎）

私の句
悟道とは南無阿弥陀仏と云う事か
小西無鬼

川柳塔新年号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

たつどし……中島生々庵…（1）
干支と辰(竜)年……若本多久志…（2）
新春ご挨拶……中島生々庵…（26）
誹風柳多留廿五篇研究……（九）……（28）
清　博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原　亮
鈴木　黄・室山三柳・入江　勇・岡田　甫
川柳塔（同人作品）……西尾　栞選…（4）
水煙抄……菊沢小松園選…（30）
麻生路郎物語……（13）……東野大八…（23）
秀句鑑賞……（同人吟）……川村好郎…（50）
（水煙抄）……渡辺暁童…（51）
近作……諸家…（22）
百人一首と川柳…（19）……富士野鞍馬…（52）
愛染帖……橘高薫風選…（40）

干支と辰(龍)年

若本多久志

毎年正月になると、新聞、雑誌は必ず、その年の干支に因んだ記事で賑う。おそらく書いているジャーナリストも、それが迷信的なものだと知りながら書いているのだから世話はないが、古来、日本の庶民階級に根強くしみついた干支への、信仰にも似た興味が異状なものであるだけに、私も日本的ジャーナリズム流にペンを採ってみた。

そもそも、この干支が日本に渡って来たのは、今から約千二、三百年前、天平の頃といわれ、以来この思想の背景には、人間の吉凶禍福がからみ、易学（占い）とも密着したために、その観念と行事が庶民生活と切っても切れないものになったのであろう。

現代でもその代表的なものは、人間の命名に干支を援用する事例が多いことで、大臣や政治家、大学教授といったインテリの中に、寅雄、卯一郎、丙午、辰三などという名前を見出す時、なにかほほえましいユーモアさえ感じるのである。

さて今年はその十二支第五番目の辰（竜）年であるが、その竜とはどんな動物なのだろうか。—十二支の研究家で有名な諸橋轍次先

うき世……戸田古方…（42）
川柳ゆーもあ同人特集……（44）
賀状に寄せて……藤村青一…（39）
一分間の柳論……黒川紫香…（77）
雅号ぶっちゃけばなし……吉田水車…（72）
「旅人」以後の麻生路郎作品……（32）……傍島静馬（表2）
初歩教室……本田恵二朗…（60）
大萬川柳「拍　手」……川村好郎選…（62）
柳界展望……（68）
本社十二月句会……（庸佑・整理）…（70）
各地柳壇（佳句地10選）……大坂形水…（76）
一路集「建つ」……堀江芳子選…（54）
「起つ」……河村日満選…（52）
「発つ」……不二田一三夫選…（53）
編集後記……（一三夫・葉子）…（79）

座右の句

凡聖一如元旦の心しる　（路　郎）

私の句

神様にふれあう鈴を子にひかせ

中村ゆきを

生の著書によると、先ず、十二支にあてはめた動物中、唯一の架空動物で、角は鹿に似て頭は駝に、眼は鬼に、首は蛇に、腹は蜃（みずち）に似ている。さらに鱗は鯉に、爪は鷹に、掌は虎に、耳は牛に似ていると記され、昔からよく寺院などの襖に画かれた竜の姿を現わしている。

面白いことは、その竜には喉の下に一尺四方ぐらいの逆さ鱗があって、ほかの者がこれに触れると凄まじい勢で怒りだして、相手を生かしてはおかないということである。それで昔中国では、天子の怒りに触れることを「逆鱗に触れる」などと言い、天子の位いの動物とされていた。

さて最後にこの竜を我々川柳人はどんなに詠んでいるだろうか、

竜　天に登る兆しや雲の色　久留美

これは川柳家というより、金沢の奇人として有名な安川久留美氏が辞世の句として残したものであるが、同じく彼の作品で

竜　天に昇る襖へ執達吏

というのもあるが、いずれも胸を打つ鋭さと含蓄の深さただならぬ句である。その他にも、昭和初期からの辰年四回それぞれの一月号柳誌を調べてみたが、僅かに

東洋の神秘にゆらぐ竜のひげ　青竜刀
書道展　竜の一字が生きている　東　里

の二句しか無かったのは、少し寂しかった。



西尾栞選

年金のくらしにもある上中下
酒癖のいまなら亡父が放り出され
ガタ落ちの威厳を父は父で知り
病妻へ婦唱夫随のあえて仲
反論をたたく構えで眼鏡拭く
ハーモニカ若きよき日の息がない

鳥取市　河村日満

阪妻の人を斬る眼と恋うる目と
ポケツトに蜜柑が一つ落着かぬ
待ち呆け酒饅頭を買うて去に
ポンポン船　明日の旅路も晴れそうな
元日や場末の如き湊町
正月も昔の父は恐わかった

松原市　谷垣史好

誓詞高く蒼天を抜けてゆく　（長男結婚）
実感のないまま姑の座にすわり
巣立ちゆくこのよろこびと虚しさと

大阪市　小出智子

ありふれた言葉が胸に沁みる日よ
夫の時計は何時までも正確に
妻の時計きれいな音色忘れずに

竹原市　三宅不朽

肋骨四五本とればすむと医者
別に意見ないのを変んに勘ぐられ
汗キラリ男の素顔極まれり
星のない街メルヘンもうずくまり
草笛とそばと信濃の鐘の音と
闇夜にも表情がある水の音

大阪市　不二田一三夫

揚羽蝶だれに便りを運ぶのか
雪の夜の情事は白い炎もゆ
「命預けます」そんな覚悟で乗る車
音のない軍艦マーチ　稿料が届いたぞ
一万円札嗅げば　けものの匂いする
政治家に尻っ尾ないのが不思議なり

松江市　柳楽鶴丸

爪短く切って職業に生きる妻
七人の敵より自分が恐しい
イコールで結んでいいやら悪いやら
男一匹迎合は致しません
コットンコットン水車の音も秋
燻る女心に導火線がない

大阪市　本多柳志

新聞のマナーを叱る評論家
恍惚の目にもたしかに勲五等
徹夜して善処と決る会議室
地価下る泡立草は花をつけ
支持票の数は拍手で占われ
スカーフの好みへ個性見直され

倉敷市　稲田豊作

慾のない妻と暮らしている平和
管理職めっきり抜け毛多くなり
再起する一歩向い風でよし
熱いもの抱いて羞恥に負けている
庭石の苔を老醜とは言わぬ
峠路も尾根も庭なり山の里

青森市　工藤甲吉

元旦暮れる　年玉くれた人も無く
天皇のタブーへ記者は触れたがり
医師優遇それから夜を寝て起きず
桐一葉バサリと涅槃門くぐる
ふんぞり返ってるかつてのお茶坊主
世の中を正しい人は追い出され

八尾市　香川酔々

陽の祈りわたしは文化人でない
クリスマス星の王子は樹で光る
蜜柑むくひとそれぞれの童唄
神話からかもし出された酒である
足跡は雪にまぎれる醫女日記
火吹竹女系家族の火を起こす

八尾市　高杉鬼遊

サボテンの花　あざやかに再婚す
正月は鬼も疲れて眠るだろう
舶来のめがねに父は酔うている
水炊きへまだ怒ってます妻の箸
喪の家に買物があり夫婦連れ
五日香新しく替え夫婦寝る

八尾市　大路美幸

少年は空を少女は果実を追いつづけ
一言も怒りに触れず姉帰る
木の葉舞う道ならきっかけ掴めそう
喜怒哀楽もう奏でない父の絃
溝跳んで少年になる笑い顔
五百羅漢の一つ一つに風の音

香川県　三井酔夢

まして秋チャルメラ聞こえ子は遠し

さいはてに居ると詩人の声透る
腐葉土になりたい欲を持ちはじめ
人恋いの晩秋の瀬戸暮れ易き
断ち難き絆とおもう海は闇

名古屋市　吉田水車

除夜の鐘電動式もまじるなり
八千代さんおきばりやすと功労賞
三面鏡アンサンブルに気が疲れ
日曜大工一〇センチ挽いては一と休み
後悔の方がたじろぐ七十四

倉敷市　野田素身郎

特選の写真淋しい僕の肩
今はただ体重のみが優る父
眠れない夜もあったと済んでから
迫力はなし定年をひかえては
妻には内緒子供に高い利子で借り

大阪市　金井文秋

それ程でないのに痩せる本を買う
重なったので口実の出きた義理
バランスを保つ道化の役を買う
貧乏神も忙がしくなる十二月
ずるいと云う眼であんたかしこいよ

八尾市　宮西弥生

黒を着る女　炎を抱かない
行動半径大きく八方美人です

美しく着飾る別れも女です
休日のビル吹く風は死んでいる
酒ぐせの口が時効にさせていず

松江市　小林孤呂二

公務員ですと仲人は張りをつけ
仁王にも利腕がある剣もち
達観をしているような捺しっ振り
表六玉なんて言われた頃が良し
うるさき人の赤旗だ購うておき

岡山県　嘉数千代香

地球自転影も日向もない動き
お年玉祖母の匂いを抱いてくれ
資本家の紐が切りたいアドバルン
負けた日の強壮剤は掌を転ず
企らみの皿へ豪華な嘘を盛り

岡山県　浜野奇童

アルバムの国旗を父は語らない
逢うて来た温もり父の叱言聞く
大臣の耳には届かぬぼくの声
長男の噂を職場の隅で聞き
愛情を子どもの数に分けて母

貝塚市　野坂つき子

うそつきな女きれいな瞳をしてた
常識と笑う女がひとりいて
歯痛など知らぬ女でまだ独り

親の名を問えば戒名書いてくれ
石蕗の花菊と競ってみたくなり

倉敷市　水粉千翁

とりあえず元旦の顔出来上り
つぎこぼす仲で番茶の輪が出来る
私を瞞せぬ勇気湧いてくる
遠い日をめぐって止まる赤とんぼ
無に悟る自然の声を聞くように

和歌山市　野村太茂津

新年に祈る遺句集開かれる
季感喚ぶとき遺句集は饒舌家
拍手の音で句集の貌笑う
百家峥嶸句集は叫ぶ中にいる
闘いはこれからそれでも句集ほほえんで

大阪市　河野君子

良心が味方言い訳せずにおく
野菊とはらしくない子の理想像
秋深くやがてこの身のおきどころ
夫婦冷戦芯まで熔かしていた近火　（つけ火による大火）
焼け後のくすぶり罪は燃えきれぬ

神戸市　中村ゆきを

献燈の百円昭和も遠くなり
ドラマならここらで銀行貸してくれ
分別を諭す方にも情に欠け
親切の底が悲しいほどに透け
七人の敵あり君子になりきれず

桜井市　岩本雀踊子

夜の火事その方角に住む息子
十指皆な役目をはたしている影絵
女の話を地蔵は聞いてやるつもり
汝の敵愛せぬ私にある踏絵
妻の留寸妻のぬく味は置いてある

宝塚市　傍島静馬

本年もよろしく病院から賀状
披露宴そのまま来いにだまされる
スタミナを養うはずが二日酔
飲まなけりや何も云えない自己嫌悪
うどんの伸び傍が気にする総入歯

東京都　山根白星

揉み手して役者一枚上である
セールスにうかと鸚鵡の軽はずみ
ジェスチャーも大きくピアノ弾き終える
聞き耳を当座は持たぬシンデレラ
また友の計なりすべなき至近弾

竹原市　森井菁居

のるかそるかへ妻の手酌有難い
セールスとして玄関の菊をほめ
飲めるから飲むのではなく淋しい日
中傷はよせ男ならやってみな
セールスに向く童顔に生まれつき

神戸市　小浜牧人

さそりが一匹　株主になりすまし
スポーツは万能　鞄持ちとなり
合理化の怯えに課長の椅子軋しむ
自らを欺く夜のコップ酒
秋は殊更過去から女話しかけ

富田林市　岩田美代

ない袖もこんなに上手に振れました
甘い語も風の痛さも知るのなり
修身を身につけ男の傘長い
時効なり古い涙は捨てて来る
翔けて来て出逢いは嵯峨の春の雪

岸和田市　高橋操子

枝ぶりの柿へ絵筆の久しぶり
ハンドルへささげる祈り新車買う
いさかいの義理には勝てず子を叱る
勉強のつかれをレモン知っていた
性医学無理におさえる害を説き

大阪市　吉田圭井堂

病って常の美食が物を言い
見下ろせば争う町も一握り
努力とは云わず例外の例にされ
民主主義血は水よりも薄くなり
一流のコック夕餉は茶漬する

宇部市　平田実男

観光地童話を神話にして稼ぎ
節くれの指が宝石よせつけず
手相より易者ダイヤへ気を取られ
リハーサル通りに行かないとこが受け
ライバルの栄転称える語が固い

藤井寺市　西いわを

おや亀が転びこ亀を笑えない
贅沢な舌がメロンを嘲笑い
洗濯器へ蛙とび込み浮き上り
色合いをまといつかせて文化財
女王様に犬の話をして握手

兵庫県　遠山可住

神代から落書きの面白さが抜けず
憎めない奴だが行儀のない若さ
真実が二つ大人という世界
明治の意見を不思議な目で見られ
ローマ字でほんまの地名読んで旅

大阪市　川口弘生

旧年と相変らずピーポーピポー
お宅さんのファンでっせと恩に被せ
六時には六時の人が動いてる
プロポーズ就職の方はごたついて
肌の艶褒め合うていて酒旨し

大阪市　宮尾あいき

備え付けの消火器もろ共家焼ける（類焼）

二十年の私の歴史も灰になり
遺影焼いて不貞の妻を自覚する
わが城と思えば広し四畳半
家焼けて私の業も消えたらし

豊中市　戸田古方

角生やす竜気の弱い竜やけど
恩返えしいつしようかと竜思う
出世してはるすっかりのぼせてしもてはる
これも出席私はここまで出世した
その疵が竜になってもまだとれず

今治市　原田一風

窓開けて解放しましょ秋の蠅
寒い膝並べて朝の待合所
又肥えたわよと銭湯から戻り
叙勲してやっと日本へ呼び戻し
御近所が建てると喧しく響き

堺市　河股緑水

玉葱を剝いてる涙にはあらず
雑布のあれも拭いとく汚れよう
ガス切れのライターみたいに病んでいる
電話でもすると別れてそれっきり
泣くことはあしたあしたと耐えた日日

大阪市　西出一栄

余後の身に地球の回転速すぎる
眠られずみかん食べよか柿剝こか
嬉しさは一句拾うた散歩道
クシャミ二つ青空低うなる思い
夕刊の柳友の被災に心身が凍てる　（あいきさん）

藤井寺市　児島与呂志

美しい言落探がしてまたどもり
駅からの歩巾が広い帰り坂
ふれあいの旅鈍行の駅も秋
バスを待つ時がむなし風に冷え
母の部屋首相答弁真最中

八尾市　高橋夕花

堰をきる嗚咽のなかの柩ゆく　（母逝きし）
悲しみの深さのなかに菊を活け
草花の紅さえうとし母の忌に
枯葉舞うこころに母の灯がほしい
新聞の隅々までも冬になる

尼崎市　黒川紫香

梅酒届けにバス電車乗りついで
ヘルメット婦警の若さ美しい
孫の手になぐられる顔を出し
停年へ次の勤めのある余裕
雨煙る湯原は露天風呂に傘

高槻市　若柳潮花

舞扇だけが私に派手に燃え
渓流の水底までも沁む紅葉
嫁くと云う噂もたてず四十すぎ

花かえて四十九日の灯をともし
涙なきその悲しみに耐えんとす

竹原市　山内静水

街路樹をばっさばっさと深む秋
四枠目でやっと漫画の謎が解け
だれからも頼りにされて嫁きおくれ
幸せな一月ふんづけられず済み
手探りへ灯が見えて来た六十路

西宮市　島居百酒

飛び越える溝巾齢がためらわせ
回顧録あの日のもしもが筆をとめ
追想の糸を手繰って若返り
愛される老人となってきた白寿
お隣の猫を小声で叱っとき

大阪市　山川阿茶

聴診器もてば背骨もしゃんとする
車椅子にのせてお詣り七五三
仏さん仲裁しなはれ本能寺
爪弾きの一人へ秋雨ムードそえ
血圧へ自分の度胸も計られる

守口市　羽原静歩

花籠に盛る日本の四季があり
微熱おして履かねばならぬ朝の靴
青春の樹氷に熔けてゆく心
雷鳥の野性吹雪いても吹雪いても
鶴老いて白一色の死を賜う

大洲市　堀内暁風

君が代を忘れる世にも菊の花
祭り客兼ねて見合をして帰り
受付の美人親切いい感じ
判断の甘さそれから地価上り
行年へ末の娘嫁かせてほっとする

米子市　八木千代

泡の意地せめて波紋を立てて消え
その上を望む遠慮と気も付かず
ひと間だけ替えた畳に老母招く
レモン切るこんな涙を隠したく
ふつ切れぬ思い火のない炉へ坐り

三重県　川上大輪

遺児の手の中でみかんが重くなる
新聞記事の死角で泣いている家族
例えばの話の中で殺される
印鑑を信じ人間信じてず
二次会でバッタリ会うた共稼ぎ

柏原市　大峠可動

汗を拭く両掌の下を冬が逝く
理想主義を越え老兵になっている
武器よりも重い物価が夜の貨車
歯車の歯が私をたしかめる
人生も佳境　相合傘の中

酒だけはドカンと据えて新春を待つ
産声の早速親をてこずらせ
ペタル踏むコーラス雲がおっかける
すりへったハンコに我が身想うとき
赤チンにすぐ手がとどく妻の位置

泉大津市　村上春巳

竜顔を拝む参賀の列に佇ち
瑞雲にのる辰年の初日の出
本流を離れた水は救えない
明治村明治の汽車がまだ稼ぎ
葵水忌や早二とせの紅葉散る

和歌山市　沢山福水

ビス一本雄ネジ雌ネジが助け合い
目の前の美人にラッシュ救われる
金かけたノドやと仲居の下心
一等地葱一本の値も違い
ほっといた菊ほっといたままで咲き

松原市　玉置重人

あす開く花を夜露が口づける
菜に住めば菜の色となり虫生きる
清貧を愛し故山の星愛し
紅葉がり稲こぐ村を通り抜け
銀婚の肩をもみ合う旅の宿

岡山県　白岩文衛

誕生日に給料が入るタイミング
一歩後退明日へつながる恐ろしさ
ワンボタンずれたような日で落ち着かず
もの想えとか木の葉散りかかる
役立たぬ正義感なら持っている

大阪市　柳原静香

塀越しの柿の赤さが気にかかり
みかえり如来やんわり包む温さ
老醜は燃えつきた鍋の湯豆腐か
われ生けるしるし国債買わされる
敬老会トイレへ行くも誘いあい

西宮市　若林草右

妻ひとりコツコツ公休日を刻む
子らみんな揃うて松茸匂う膳
絶句したあとの言葉を怖く待ち
音に手が届かぬ先のさき案じ
冬になる早さで雨の日が続き

島根県　堀江正朗

旗立てず何んの文化ぞ祝日ぞ
人生路やっと直線へ出て事故死
霜きびしさりとて夫子起す役
年金で食ってるそうな死んだそな
日曜大工仕上げの後に知恵が出る

出雲市　原独仙

正月に飾る優勝杯磨く

大阪市　大坂形水

正月を脱出したいという老妻
寄附持って行ってちょっぴりてれてくる
税務署へ要る寄附金の領収書
底つけば騰るその底分らない

倉吉市　奥谷弘朗

意気込んだ話も金で行きつまり
福相の耳もつ妻をまだ信じ
想い出に生きてガラクタばかり増え
結局はなんとかなると云う余生

東大阪市　市場没食子

テレながら行く敬老の慰安会
秋刀魚の候もとより下戸に候わず
幻の魚がホテルの膳にも出　（和田湖）
遊覧船秋を満喫さすしぶき

堺市　河内天笑

病名をたんと知ってる子沢山
ふたありで祈ると妬けてくる天使
強がりを云うとピエロに見抜かれる
ブランコが揺れている間に別れよう

富田林市　板尾岳人

太陽にだんだん近く山の峰
もう少し妬いてもいいぞ山男
太陽に聞けば今年も雪豊か
滝つらら山の男は汗が落ち

島根県　藤井明朗

老境を迎えしみじみ夫婦愛
愛はゲームよ青春の海のこす
ヒルのドラマはおんなの鍵ゆれる
愛情の過保護つまずく子に育ち

鳥取県　清水一保

人間の欲がセリ合う菊花展
稲刈りが済んで時雨に詩が有り
エンジンの音が脳裡にまだ残り
初孫の育ちにふれる二人切り

岡山県　横山一声

十人の意見まとめる役となり
ジーパンがほころびそうなヒップ行く
義手とは知らず握手をつい求め
炎えて居る女に夜が火を付ける

岡山県　直原七面山

逢いに行く嘘だと知っている鏡
女四十　沈む夕陽を意識する
変化球へマダムあえなく陥落し
草に寝て雲の動きを見て飽かず

岡山県　川端柳子

それぞれの安否気遣う星が降り
気に入った一言胸の万華鏡
まだ咲いて居たいサルビア引っこ抜く
ウーマンリブ他人にまかせて夫愛し

松江市　中川晃男

松江の灯やっぱりぬくい　旅終る

還暦の今年は沁みる萩の風

相槌を打って笑うてわびしけれ

褒められて時に皮肉な　老い達者

岡山県　出原敬一

白杖に大地の声は偽らず

なぜ跳ばぬ蛙覚悟の轢死かも

覇気失せた子に新たな母が居た

悔多き年長かりし晦日蕎麦

橿原市　岩井本蔭棒

直線で引く国境の過去哀し

勿体なや今朝も惰性の目を覚まし

警察に顔の効くのを付けてやり

押し返えし押し返えされて貰っとく

生駒市　草深酔升

灯火親み過ぎて養生の身を忘れ

夜も更けてリズムに乗って来た小雨

喋らねば結構貫禄ある男

満ち足りた心へ宇治の茶の香り

美祢市　安平次弘道

罠掛けて女は徐々に脱いでゆき

若い者にまかせられぬと嫌われる

諍いはよそう地球はまるいんだ

心まるく巨匠静かに踏むろくろ

氷見市　関美子

ミシン踏む明けさせまいとミシン踏む

豆草履老婆に精薄庶子があり

幾山河女の誤算大きすぎ

異型血漁って冬の蚊生きのびる

京都市　松川杜的

版を押すような生活にも秋の花

新旧調和こんな京の街が好き

二杯目のコーヒが今日を過去とする

コメデアン家では妻に笑わされ

竹原市　小島蘭幸

こてんこてんに負けてすっきりする若さ

離婚していっそう美しうはなり

勝負の厳しさ勝って知り負けて知り

たかぶりを沈める朝のレモンテイー

西宮市　藤村〆女

悲しい過去あり募金ためらわず

つまずいた石に心を覗かれる

小さな夢見つけて余生の坂のぼる

梅一輪立てて仏間を新春にする

仙台市　川村映輝

波静かテトラポッドの休養日

福祉三年そろそろ影がうすくなり

酒の席になって一人前となり

女が作り男が食べて何故悪い

島根県　榊原秀子

ころげても芋の葉の露手をつなぐ

縫針に心の乱れみすかされ
人生達観年に比例はしてくれず
とりようで嫌な噂さとなる会話

米子市　林　瑞枝

附き添いのあわれ病人と共に痩せ
目と目と目交わして運転心理読む
親友の直言くらしの知恵袋
恩を知り慈愛で報ゆる輪を広げ

松江市　恒松町紅

電話口小さな嘘を妻がする
旅鞄下ろせば庭が水を待ち
褒め言葉知らず社会の隅に居る
七五三の孫へ休暇を貰って来

大阪市　江城修史

胸襟を開けば罠へうまく乗せ
末端の下請ノルマが追い廻し
子に賭ける夢を妻と温めあう
身構える妻に木綿の強さ見る

堺市　高橋千万子

鬼笑うてた来年がきてしまい
新しい暦のここに待つ吉事
さい銭の小銭ないのもお正月
初詣で神もお世辞か吉ばかり

大阪市　飛田好一

老残のファイトまだまだという自信
日々好日三恩という有難さ
うぬぼれの心見抜いている鏡
浮き沈み男へ酒がつきまとい

東大阪市　竹中肖二

ほんとうの愛は与えてなお足りず
青い目の女をなんでコマーシャル
勇壮な火炎太鼓は浜で打つ
落書きで余生をしばし埋めようか

島根県　堀江芳子

誕生日五十路も嬉しい鯛の色
生かされているから泣きたいこともある
雨音の激しさ興奮したように
セールスの根性　蠅に似て歩き

鳥取市　両川洋々

我が道を歩めば儲けに遠ざかり
惜別のドラマにさせるベルが鳴り
石段で車中の酔いを持て余し
退院の安堵へ妻と菊へ佇ち

東広島市　高橋鬼焼

過去を消す渦かも知れす旅に出る
灯に燃える女心の爪をとぐ
地下足袋の土も乾いて秋終る
眠るにはおしい月夜へ鶴を折る

島根県　小砂白汀

電線へ銀のモールをぽたん雪

北風の面罵椿にこころよし
信号もレールも凍るアスファルト
捨てたくはないが重い重い恋

高槻市　福田丁路

餅つきが機械に変り味気なし
マイカーの事故で瀕死の親不孝
コマーシャル通りのお洒落濶歩する
亡者めく声で占うコンピューター

京都市　都倉求芽

瀬も淵も妻と云う棹あればこそ
青空へチャック締めるよに飛行雲
満員の中でくしゃみが止まらない
白壁の白さ　もみじを暮れ残し

東大阪市　竹中綾女

永源寺さしみこんにゃく麩の土産
芭蕉もさしみこんにゃく詠まれたり
羨望の瞳で若人の対話聞く
品定めされてるような瞳に出会う

鳥取県　鈴木村諷子

古飯盒わが青春の文化財
一日を生きる感情消費量
ふくみ餌してめんどりを呼んでいる
煩悩のちから一杯石投げる

和歌山市　吉野冨子

美容師の世辞も気ままの好き嫌い
見抜かれたうそへ窮鼠の貌になり
腹割って信じた友に裏切られ

大阪市　藤田頂留子

厚化粧でもぬりつぶせない過去
羽根過信して家鳩事故死する
注連縄を張ってマンション起工式
薬飲むよりはと財布のゆるむひも

倉敷市　小幡里風

投げ入れの花の素顔に訓えられ
ベコニヤの白もの云いたげに快復期
ふるさとの素顔に心洗われる
カルダンの図柄で冬の陽を集め

大阪市　中川滋雀

尻叩く妻の一理が判りすぎ
昨日今日明日につながる飯を喰う
夫婦して喘えぐペースの歩は揃え
開発の早さは池の名で残り

玉野市　小谷仙山

印鑑を押さねば書類動かない
古里の味が受けてる文化都市
転んでも起きても生きる道一つ
心にもない一言で場をしずめ

今治市　越智一水

母に歳聞かれて僕も白髪なり

日だまりがあるからそこへ愚痴がより

旧道を歩くたのしさ無一文

よいことがよいと言えない世のしくみ

大阪市　室谷徹舟

いける口マイカー置いて去ねと云う

菊人形菊でつながる人の情

もう一生無理出来まへん狭心症

心臓と相談をして靴をはき

東大阪市　落合思月

姑さんの話に溶けて如才なし

狂い咲き喜寿に近い恋に燃え

たくらみのない嫁の目が澄んでいる

子と孫と七人波風たたぬ家

岡山県　竹内翁童

訃を聞いた友のもまじる年賀状

実印を変えて幸運待ちわびる

種火うずめて炉ばた寝につき

寒椿肥料のほしい色で咲き

枚方市　宮川珠笑

落葉追う風を窓より見る微熱

酔覚めて襖の影におびえてる

安住の灯にゆっくりと針運ぶ

ゴーゴーが趣味と舞妓の目が光る

大阪市　天正千梢

神詣り蟻一匹もよけて歩く

やわらかい物腰へだまされまいとする

くじけ給うな六十年の財なくしても（あいきさん宅全焼）

島根県　錦織文子

元旦の挨拶今朝は折目つけ

十万の距離へも母の愛絶えじ

タイミングのよさへ我身をうぬぼれる

豊作の手が一粒の麦拾う

愛媛県　村上旭童

ねたきりの父がやっぱりいて呉れる

昔は良かった話を聞きに帰る島

健康の秘けつ借金だらけです

チューリップもう来年をのぞきかけ

竹原市　時広一路

金屏風僕までうきうきさせてくれ

神様の同情心をくすぐらす

砂妬いて相合傘の名を埋め

人形の心私が入れてやる

和歌山市　小川佐知子

例えばのたとえが当っていた不運

恥じている子に叱咤する声がない

もう逢わぬと快めた電話をまつ矛盾

まっすぐに歩くあなたで追いつけず

東大阪市　斎藤三十四

我が家の御紋という低い鼻

物価高に余白の人生狂わされ
皇后の笑顔会見の席和む
吉良上野介も郷里じゃお殿様

小松市　馬場魚山

敬老の日へ缶切りを持たされる
石垣の高さ別荘かと思い
皿茶碗の礫にぐっと耐える日も
着せてもろう度見せにくる女の子

和歌山市　若宮武雄

ほほ笑みは矢張り鏡も好きらしい
妻があるしみじみ思う妻の留守
笛吹けば踊る掟を負うピエロ
仲間への錠のかけない窓ひとつ

大阪市　津守柳信

流せない涙が覚悟強いてくる
まさ夢にしたいせめての黙秘権
力添えされる感謝へ自己嫌悪
ハネムーン送って現実取り戻し

愛媛県　渡辺暁童

残る色香の　博多献上
酒の名柄も　左り書き也
我田引水　冴えぬ裁量
つがれそうなで　置かぬ杯

神戸市　佐々木静泉

無言でも通じる妻がいてくれる
無視かあきらめかこの頃妻は逆らわず
朝肝に命じた薙がもうゆるみ
八つ当たりやんわり受けてくれる妻

倉敷市　能登原白水

末っ娘の衣裳がはえる菊日和
菊人形栄華の夢を見る如く
金婚を夫婦で祝うのもたのし
初日の出神代に還す寂に佇つ

和歌山市　津田与史

初詣信心でない顔もあり
丹精の松あり元旦悔はなし
今年また老人だけの三カ日
老妻は後へ残ると決めかかり

大和郡山市　森田カズエ

ファスナーの無叛私の手に負えず
冷戦の膝とも知らず猫がくる
かつぐのが好き日本の秋祭り
若さには勝てぬと思う記憶力

笠岡市　松本忠三

日常の会話漁師の喧嘩ごし
人間の性格犬に見抜かれる
後列の万歳中途半端な手
十二支へ理くつをつけて期待する

大阪市　有信新之助

コップ酒低いコストでよく動き

失礼にはならんよ鯛のあら煮
銀行の枠など要らん日銭かな
一家心中はガスがいいなと覚えとき
伊丹市　小川静観堂

うまいこと言うておねだりする初孫
イヤリング玉の汗する二十五年
雷も鳴っていますと孫におしえられ
蟬はみんな死んだかと孫にきかれ
神戸市　仲　どんたく

フルコースのナイフに似たり手術室
五・六匹天狗集まりグループ展
優勝のどさくさ滞貨一掃し
吹うてほし吹いすぎるなと公社云い
和歌山市　内芝としよ

喜怒哀楽鏡と共に初老の日
美しい想い出だけの駅を過ぎ
恥かいて一歩前進した想い
誘われて急に血潮が騒ぎ出し
鳥取県　林　露杖

菊を守るあまりに若き未亡人
たしかなる愛よ腕に眠る孫
孫叱る背中に母の眼が迫る
雨降れど恋は女を走らせる
滋賀県　溝口はやを

芽出度いと言って愚かな歳がふえ
あら貴と母乳をのます母がいる
不況風馬鹿正直が忙しい
借金をして日の丸が埋める穴
鳥取市　大塚豊生

八十有二年の幕閉ずる秋　父急逝（一句）
転居した街で故郷の梨を買い
名月を挟んで男対男
虫の音に耳を澄まして老いはじめ
倉敷市　藤井春日

毒舌が嬉しく親しさを覚え
委かされた鍵が善を悪に変え
仕事一途夫怖い美しさ
化かされた自分が馬鹿と悟る夜
大阪市　黒田真砂

横這いになってホームを通りぬけ
鍵握る女心を開らかない
銀婚へ手探り互に助け合い
倖せに背を向け明日の糧探す
柳井市　弘津柳慶

金かけた割には帯止め見てくれず
痛ましい程に陛下は口ごもり
私作る人でいいわと妻すなお
停車した車へ横断ためらって
大田市　藤田軒太楼

仏前へ香を焚く善人になり切って

車内の揺れ襟足の白を探ぐる
昭和っ子の心臓本人連れて来る
就職難大学生らしうなり

守口市　野呂右近

避けられぬトンネル腰を曲げて抜け
天職と信じ不満も知らぬしわ
考え過ぎ冷たくなった茶の渋さ
良心をマスクで覆うヘルメット

姫路市　梅谿庵不酔

難題は委員付託でけりをつけ
地図にない国へ俺も行くだろう
口下手も酒が上手に庇ってる

岸和田市　葛城伊三郎

心底は酒を飲ましてから分り
あの人もいける口かや赤い鼻
貸す事を断り兼ねて酒を出し

諫早市　原田明春

十二月やりくる珠も動きかね
早熟へ親があわてた妊婦服
おとろえを踏んだペタルに教えられ

大阪市　河井庸佑

好きなようにせよといいつつ監視する
結局はバーゲンセールで高くつき
思わくがあっての所作とまだ知らず

呉市　槇田英詩

益のない人もまじって過密都市
核家族なんのことやら子だくさん
政治家の嘘にも慣れてマイペース

島根県　大森孝華

道草の後姿へ秋の風
水平線見守る無事へ夕日燃ゆ
さりげなくゆれてコスモス秋へ媚び

今治市　小笠原有里

青い空何か描きたいほどつづき
色っぽいしぐさうっかり過去を見せ
物入りは大学なみの幼稚園

兵庫県　河原みのる

アレほどに憎んだ夏を恋しがり
其処にいた筈見当らぬのも農家
赤トンボ余命が塀にへばりつき

堺市　伏見茂美

着流しが好き今はウールで我慢する
世事にうとい夫にしたと今悔いる
昔から仕事を逃げる悪いくせ

松江市　岡崎祥月

真剣な目に欲望のとげがある
子や孫の仕草気になる老いの意地
出す列の窓にならんで俺もいる

松江市　谷のぶお

立ち止ることのやすらぎ海が見え

かまきりがかまきりを食べている怖さ
落葉焚く煙の中に亡友が見え
岸和田市　福浦勝晴

元日の夜を妻と飲むホームバー
夢に出たどこかの墓のある風景
建前と本音論戦する屋台
宿毛市　山本窓花

セリ市で馬喰の握る手にゆだね
化粧した心の奥をさぐるまい
ほつれ毛の白き横顔秋の冷え
東大阪市　桑原喜風

せめて朝職場に欲しいエチケット
騒がしい街を離れて喰えぬ僕
八百万祈って御蔭まだ遠い
富田林市　和田維久子

滝しぶき想いを千々にくだくごと
あやまちを償う日々へ菊の出来
砂の上波は足跡など知らず
平田市　久家代仕男

金の無い愚痴は嫁く娘に聞かせまい
誘われた味へ今宵は妻を連れ
若妻の言い負けて来た夜の無口
高槻市　山田季賛

お見舞に行ける身分の病み上り
大東市　土岐トク子

病む弱さふるい立たせた旅情の絵
銀婚の歩巾揃ってハネームーン
二十四時間掌中にありスペクタル
八尾市　古川鶴声

メモよりも確かと指に糸を巻き
歌合戦家事手伝いが合格し
女教師が車内で読む本別に持ち
鳥取県　森田布堂

弔辞代読声の演技に泣かせられ
栗飯に茸汁という山に住み
碁仇が手ぶらで来るを子が憎み
大阪市　西川誓二

この大阪もブルースカイのお正月
なつメロよ心の古傷なぜ抉る
牛乳が家で待ってる夜勤明け
和泉市　西岡洛酔

老ひとり何処を尋ねる朝を待ち
いさかいの一言積木音を立て
地の底の先祖へ叫ぶ俺見てや
唐津市　新岡回天子

傘さした自転車まっこうから当りそう
舟小さく大河ゆうゆうとして流れ
代祭の祝日商人忘れがち
貝塚市　行天千代

うさ晴らし女は食べて又食べて
ひと言を押えて夫婦妥協する
あの人が墓から見てる秋ざくら

大阪市　神田秀峰

振り分けの土産で着いた新幹線
反対があるので議事が活気付き
玉の輿乗ればずぼらが付いて来る

大阪市　神夏磯道子

張りぼての倖せ誰にも触れさせず
力んでる肩を師匠に注意され
平凡が青い鳥だったを悟り

橘高薫風

新年や男も竜も玉を抱く
盃の酒甕の酒より重し
スト権スト昨日は勤労感謝の日
水戴いて旅人が去る過疎の村
花火爆ぜ微塵地獄にいるふたり

川村好郎

極月の鏡自嘲の顔うつす
うらむまい都会の雪は消えやすく
聞いて欲しいことあるのよと電話
言訳けへその相槌が聞えない
ふり向きもせぬのに男追いかけて
元旦の一歩国旗を掲げに出る

西尾栞

長生きも芸のうちなり秋叙勲
菊人形黄門さんは黄菊白菊
もらいもの廻し上手な妻にして
雰囲気を和らぐ蜜柑くばられる

菊沢小松園

ええとこの生れと見えて無愛想
無条件降伏に似て交換す
昼の顔見たし夕べに忘れたし
からすもう流行おくれの色と知り
契り忘れておんながひとり雲となる

若本多久志

絵看板時の流れに眼をつむり
お人好しといわれる心に弥陀がすむ
隣まで来た倒産にチト慌て
老生と書いてはみたがそらぞらし
人生を夕陽の如く沈まんか

尼緑之助

過疎のバスゆっくり乗ってゆっくり降りる
おい俺を見ろと桁楣が歯をむいて
仙台の産声　何人目の孫か
ボーナスの頭痛お酌も心得る
労組の年始お酒も勇ましい

浜田久米雄

みんな言うからお目出たいお正月
しようもない句ばかり一年中作り

宣告は禁煙という厚い壁
来るものが来たのでたばこやめにする
禁煙は淋し飴玉またしゃぶり

本田恵二朗

深みそむ高野の秋に迎えられ
ご先祖を高野に迎え対話する
回向の声西室院の秋にしみ
霊廟にぬかずきしばし無我にいる

近作

今治市　月原宵明

真打ちの羽織は少し褪せている
柿一つ烏に罠のように見え
七人の敵へパンツの紐ゆるむ
許しそう女のさがの哀れとも
黙祷というのに手形のこと思い

名古屋市　鈴木可香

昇竜にあやかる年の初日の出
干柿のすだれ十二月の飯田
障子張り猫ぬける穴一つあけ
くすりでは明治の頑固治らない

大洲市　米沢暁明

鯉の町鷗外の町ふきの茶屋
キリシタン乙女峠の秘話悲し
審査などいらぬ我が家の菊花展

群雄の眠りしずかに秋の雨

正本水客

火振り漁　水の化身となる鮎か
苔の庭　大屋根の影うごかずに
蝶の黄が苔のあおさを深くする
野天風呂　霧雨と湯気まざり合う
柿落葉クルクル蜘蛛の巣にクモを見ず

飲み仲間誘惑したともされたとも

岐阜市　市川鱗魚

無粋とも言われ妻亡きこの酒仙
一陽来福義手に片手を打つねがい
成上りその目うつりに知る育ち
初春の酒煮豆ころげたのも話題
お勘定の中へマダムの笑い顔

東京都　池口呑歩

大八のペンに路郎が生きている
路郎物語読み浅学を愧じるのみ
ほのぼのと寒夜を路郎物語
路郎物語に東京は何しとる

今治市　長野文庫

綱引きの審判どちらも応援し
白鳥の自由はそこらあたりだけ
休暇明け現像液の封を切り
機械化しますますたばこ屋の無口

麻生路郎物語（13）

〝川柳雑誌〟の誕生

東野大八



当時の川柳雑誌

「川柳雑誌」が創刊されたのは、大正十三年二月であった。盟友日車と半文銭の新興川柳誌「小康」への参加を厳しく拒否した路郎の脳中には、すでに川雑発刊への構想が潜在していたことは明らかだ。

（愉快な雑誌で、広告の利く雑誌を出すことにした）

という「土団子」発刊当時のモチーフが、いぜん彼のこころに強くわだかまっているのはジャーナリストに加味された経済センスがそうさせたとも思える。もともと路郎は、経済畑の学識素養のうえに育ってきた人柄でもある。

柳眼を六厘坊によって開かれ、この人物に兄事し古典川柳の中におのずと短詩型部門での詩眼を開いた若き路郎は、柳界の〝子規たらん〟（川柳雑誌古稀特集号参照）との作句志向を〝新短歌〟川柳の道に求めたが成らず、古典川柳を近代化した庶民の中の新川柳に活路をみた、少くとも川雑創刊の背景には、こうした意識が色濃く漂っていたことは否めない。日車、半文銭の「小康」への誘いに対し冷たく袂を別ったのも、路郎の新短歌運動の敗退が大きな要因を成しているからだ。

亭々たる堂前の柳の大樹を見上げた遅日荘の当主路郎は、清貧の風趣に決して甘んじてはいなかったのである。時に彼、三十七歳。

「川柳雑誌」の創刊号は、大正十三年二月十五日の発行日付で、菊判三十六頁。兵庫県武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地・編集兼発行印刷人麻生幸二郎（発行所川柳雑誌社）一部三十銭―十二部三円、振替大阪三一五一四番で、裏表紙の川雑社同人は主幹麻生路郎の下に同人岩崎柳路はじめ二十四人・支部は十一（大阪七、神戸三、山口県一）である。創刊号のトビラには、つぎのような短い発刊の言葉が記されている。

「現代人の思想にぴったりと触れた詩と云えば、川柳の外にはない。我等は此の川柳によって人生を的確に批評して行きたいと思っている」

内容を眺めてみると、まず巻頭に特別活字で〝誤れる川柳観を排す〟とあり、傍見出しで▲現代人は刺戟に生きる▲白紙になって研究せよーとあり、本文は二段組総ルビ付で四頁にわたり、標題の絵解きを試みている。一口に言えば、それは庶民大衆への川柳の啓蒙認識に尽きるだろう。川柳には無関心な一般社会人へのこの川柳PRのための語りかけには、路郎の烈々たる川柳愛が熱っぽく紙面にほとばしり出ている。この巻頭言に終りのくだりに路郎はこう結んでいる。

「単に川柳というものは決して世間で考えているような、つまらない謎かけのようなものでもなく、俗悪でお座敷にのぼせぬようなものではないというだけを知って頂ければそ

れでいいのです。そして今迄に先入主となっている曲解をさらりと西の海へすて、全く白紙となって真実の川柳を研究して頂きたいのであります。私達が「川柳雑誌」を発行することになりました主たる原因は、世間の人達に真実の川柳を知って頂きたいからであります。（中略）従来の川柳雑誌は申合せたように初心者に不親切でありました。それは自分達の研究に忙しかったのによりましょうが、初心者を導いたり、世間から誤解されている川柳を釈明するために用いるだけの紙面を持たなかったのにもよるでしょう。私達はそうした点を特に、この「川柳雑誌」で補って行きたいと思っております。」

作品欄は〝近作柳樽〟路郎選（三頁）があり〝募集句〟には〝仲人・井上剣花坊〟〝花輪・岸本水府〟があり、一頁を埋めて麻生路郎の名によるつぎの十句がある。

—ひるひなか蝿とる用があるばかり
—疑ふたまゝで一週間は過ぎ
—暇な日は三味線張替へる気にもなり
—平凡の幸福豚へ話しかけ
—豚の子へ続く豚の子ばかりなり
—時計にまでうつる神経衰弱症
—きれる気かこの頃歯に結はぬも
—踊子へ雲でも降りて来そうなり
—青いソフト東京の夢巴里の夢
—初恋の思ひ出になる夏蜜柑

初心者指導、古句研究の発表、並びに川柳の社会化運動の機関誌として刊行に踏み切った「川柳雑誌」は、まず経済的確立、月刊断行、量的発展、それから質的完成への方針を定め、その第一巻第一号を世に送ったのである。こう述べたあと、路郎は川雑二三九号の戦時の〝雑誌奉還〟終刊号の〝苦斗四十年〟の稿でつぎのように川雑発刊時の思い出について記している。

勿論その反響は大きかったことは言うまでもなかった。久良伎氏は「川柳雑誌」という名は潜越だと云ってきたが相手にしなかった。しかし「川柳雑誌」が出てから、川柳の雑誌を川柳雑誌といえば混同の惧れがあるので柳誌とか、川柳の雑誌とか云わねばならないことになった。その不便さは他誌に対して気の毒ではあったが、社会を目標に刊行するためにはやむを得ないことであった。これも一つの反響に相違ないが、それよりも大きな反響の幾つかがあった。

「川柳雑誌」の月刊断行は、他誌の脅威となり、「番傘」の如きは年三回乃至四回位の不定期刊行であったが、しどろもどろに追随してきた。合併号まで出して漸く三年目に月刊誌になった、他はおして知るべしといえよう。

型についても「川柳雑誌」の菊版型が、従来の豆本式や四六横判にどんな影響を及ぼしたかは、紋太氏が度々書いている位であるから、手前味噌でないことが知れるであろう。「きやり」の豆本、「番傘」の四六横綴などをはじめ、全国の柳誌という柳誌が、「川柳雑誌」にならって遂に柳誌菊判時代を出現するようになった。我社では従来の寄贈本位を改めて定価売を断行した。それには面白い話がある。

私が東京へ出かけて、内幸町の旅館に泊っている際、宮尾しげを、川上三太郎の両君が訪ねてきたので、三太郎君から一カ年の購読料をまきあげた。しかしただまきあげた訳ではなかった。一カ年分は、社の会計へ繰り入れたが、三太郎君にはビールを半ダース呑ませることにした。ビール代は勿論、私のポケットマネーであり、その金は私の勤労によって生れたものであった。川柳雑誌社へ多年つぎ込みこそすれ、社からビタ一文の収入もないことは云うまでもなかろう。

私は私の理論を徹底させるために、運動費持ちで馳けずり回ったものである。路郎はオレから購読料をとった。誌代（柳誌）を払わされたのは生れてはじめてだと三太郎はよくこのことを誰彼に話していた。当り前ではないか。私が着服する誌代ではなし、川柳を愛すればこそ誌代の請求をするのだ。呉れてやることはイトやすいことであるが、それでは購読者が殖えれば殖えるほど、社は廃刊に近づくことになるのだ。それでは発展は遂にのぞまれない。発展どころか潰れる外に道がない。

これが私の所論だった。柳誌の多くが兎糞的刊行に陥ち入り栄養不良となった主たる原因はそこにあったのだ。私は友人であっても決して無代ではやらなかった。やむを得ず無代で送った友人の誌代は私自身のポケットマ

ネーで支払った。弁護士をしている友人が、麻生君は偉くなったネ、といって快よく誌代を払ってくれた。この友人は二十年後の今日でも誌代を払ってくれている。宮尾しげを君には購読をすゝめなかった。当時は漫画家であって川柳家ではなかったからだ。

その当時の柳誌は、何れも発行部数の一割か一割五分位しか誌代の入金はなかったものである。あとはみな呉れてやったものである。呉れてやるといえば聞きなれがいいが、誌代を請求されるだけの値打ちのある雑誌を発行していなかったとも云えるのである。

そこで話は常に誌代に値する立派な柳誌を出すように心がけた。月刊断行もその一つ。絶えず内容の充実に留意したのもその一つであった。句の上に於ての主義主張には一歩も譲らない私も、社の経営に於てはつとめて摩擦を避けた。斯くして「川柳雑誌」はグングン伸びて行った。

「飛行機に、競馬に、全国中学校の野球試合に、全国のファンを熱狂させる鳴尾から『川柳雑誌』が生れたということは、なんだかいい意味でかつぎたくなる。『川柳雑誌』によって天下の鳴尾にしたいと思っている。ところが創刊号の発行部数とその売れ行きは、こうした専門雑誌のレコードを突破したので同人一同歓声をあげて、更に活躍を期している。この調子でいけば『川柳雑誌』の鳴尾ができあがるのも遠くはあるまい。＝路郎生」（川柳雑誌二号・編集太与里）

ここで路郎が川雑創刊に踏み切った、いわば引金となった一つの事柄について述べておこう。当時大阪に川柳以交吟社というのがあり、柳誌「みをつくし」を出していた。路郎はその顧問格であった。川雑の出る前年、結成三周年を迎えた以交吟社の連中が

「柳誌みをつくしの在り方にあきたらず、その同人連がそろって私を迎え、私が主盟となって大改革をして貰いたいと要請してきた。もし腰をあげて頂ければ、この柳誌を廃刊して、新柳誌を改めて刊行したいという。私はそれを受けることにした。同柳誌は直ちに廃刊が実行され、私の手によって「川柳雑誌」が生れた」（山南燈メモ）

このとき路郎は大阪毎日新聞社の経済主任の職にあったが、右の事件とともに直ちに辞職届を出している。かねて抱懐する新柳誌発刊の夢に、片手間仕事ではモノにならずと判断した、とみる向きが強い。

このような事情から「みをつくし」同人であった吉川啞人、高橋古城山が宣伝担当。竹田蘆穂が編集、橋本二柳子が会計、太田一声が広告、といった川雑発行のための部署が定められ、他の同人は住居地域中心の川雑支部責任者となっている。したがって川雑のスタートは、既刊三年の柳誌（四六版横綴二〇頁の実績をもつ）スタッフが主柱となっていたのである。そのため路郎はひとり全力投球の筆陣を張り、作句の一方純正川柳の社会普及の講演や指導に馳せ回っている。活力に溢れた川雑のスタートであった。

川雑二号には口絵写真がある。二月十八日（T13）川雑第三支部（酒井零骨）主催の下に観梅句行を金熊寺一目千本に催す。その際の一行の記念撮影とある。鳥打帽子に背広ネクタイにオーバー姿の、壮年期の路郎の微笑を囲んで、マント襟巻、中折帽子や毛皮帽子の一見三十代の連中二十九人の楽しそうな貌が並んでいる。

また、この二号には本社創立川柳大会（一月十九日於大阪南堀江書林倶楽部）の盛況ぶりを特集した総ルビ付六頁にわたる一大デモストレーションがある。路郎は本誌に〝一句を遺せ〟と二頁にわたる論説を発表している。

「私には未だ真に後世に遺してはぢないような句は一句もできていないのであります。二十年の句の中から自分で捨てかねる句を撰り抜けば或は十句位はあるかもしれません。けれども識者に見せれば一顧の価値もないかもしれないのであります。しかし、私は川柳を捨て得ないのであります。それは私の生命を永久に伝えるものは川柳の外にはないと思うからであります。せめて一句でも後世の識者に示しうるような立派な川柳を遺しておきたいと思っております。本誌の読者も後世に遺し得る一句のために力作せられたいのです」

後年の有名な路郎の川柳訓〝生命ある一句を遺せ〟のこれがその原典である。

北川 春巣 著
聴診器
売切れ
感謝



川柳人協会主催「再会」披講中の生々庵主幹

新春ご挨拶

中島生々庵

正月とはおかしなものである。私など、物ごころついてから半世紀をとうに過ぎているのに、甘ずっぱい夢や祈りが、何処からともなく訪れてくる。しかしそれであればこそ、何とか支えられた私にとっての人世であるようにもある。又そうした雰囲気の中からこそ、いろいろ変ったテーマが発生して来る。ことしこそ一チョやるぞ、と坐り直してもみるのである。私は半歳ほど前に「一万年後」という翻訳本を読んだことがある。「現代物理学では、太陽が燃えつきるまでの期間を六十億年という数字を示している。人類が滅亡するのを眺めるのは、すばらしいショーであるかもしれないが、それを生き残って見物する人間は、だれ一人としていないのである」。元日の朝からおこたに入ってチビリチビリ独酌をやりながら、前に読んだこうした本の記憶をたどることは、寔に愉しい。

夢は夢として、現実には「川柳塔」も12回目の正月を迎えたのである。10年とか20年とか、60億年に比べると文字通り一瞬間にも足らぬ時間ではあるが、初めおぼつかなかった足どりも、近頃どうやら「川柳塔」らしく整って来たのは喜ばしい。これは、あたたかく見守って下さる皆様のご支援や、ご鞭撻のお蔭であることは言うまでもない事で、毎年の新春ご挨拶にも申述べて居る通りである。更めて心からの感謝の意を表す次第である。

ところで今一つ、旧臘12月7日京都かんぽうるで、日本川柳協会は第2回目の総会を丁

頌春

中島生々庵
西尾栞
菊沢小松園
橘高薫風



うまさをそのままお届けします
アサヒビール

度一か年振りで催した。京都の常任理事の紅寿、清造が中心になって会場やら万端の企画を世話してくれた。前日まで国鉄ストで日本列島全域にわたり大混雑の最中だった。それが当日はストも中止となり全国から集った会員で平温なムードに溢れ、広い会場にもり上がる雰囲気は日川協の前途をトするに充分であった。

手ばなしで喜んでばかりは居れないとしても、総会の討議時間は全国から意見や批判が活発に且忌憚なく発表されるし、懇親宴ともなればいやが上にも熱気に包まれ、予想以上の盛況となり、祝盃の手も高々と力強く、いやこいつァ春から縁起が好いわえと、一足早く新春がやって来た感じだった。

耳を傾けさせる数多くの発言の中で私が一番嬉しくうけとって有難く思った事は、『日川協は、発足して以来最早一か年の月日がたったのに、本日総会に出席して報告を聞いて見ると、何一つとして仕事らしい仕事をしていない事を知って、がっくりした』という意味の言葉があった事である。厳しいこの批判の言葉を何故私は嬉しいと感じたか。簡単に、逆説的に言えば、この批判はとりもなおさず最も強く日川協に関心を持ってる言葉であるからである。最も強く日川協を愛して居る言葉であるからである。

いみじくも私は、私達の「川柳塔」が10年前に発足した当時、「川柳塔」を遅しく明るく育ててゆくには、『いそいで大きく育てようとか自分のてがらにしようとか、そうしたあせりや功名心を出してはいけない』と自戒した言葉を思い出した。又、獅子は生れて間もない仔獅子を万仞の谷底に蹴落してスパルタ教育をするという説話も思い出す。時あだかも総会の日の12月7日は、12月8日の前日である。12月8日とは知る人ぞ知る、その昔大本営発表が華々しく放送された朝である。私は日川協の成育を、大本営発表の如きうたかたの誇衒に託する事は真っ平ご免である。一年位の成果に欣々然と躍り上がる賛辞よりも、撫然たる丹心を聞かせて貰う方が、どの位嬉しく、力強く、しみじみと感謝の気持ちで一ぱいであったのである。かくして盛大に終った日川協第二回総会は明日からの明るい希望の歩みに踏み出した。ご同慶至極である。蛟竜の雲雨を得て、大いに器量を発揮する歳であることを祈ってやまぬ次第。蕪辞を連ねて新春のご挨拶とする。

若本多久志
北川春巣
正本水客
川村好郎
（順不同・雑詠選者）

お役だてください
アリナミンA®
タケダ
効能＝肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB_1補給。脚気。神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆食後すぐおのみください。☆25ミリ錠。



久　恒　紀　内

誹風柳多留廿五篇研究

―（九丁）―

清　博美・西原　亮・八木敬一
鈴木　黄・紀内恒久・室山三柳
青木迷朗・入江　勇・岡田　甫

145　**下女が面テも白〳〵と花の朝**

清―年中行事のうちでも、春の花見は女達にとって、大変うきうきとする行事の一つである。明日は花見という宵から、そわそわと準備に余念がなく、明ければまた早くから仕度にとりかかる。下女も連れていってもらえるというので、まるで壁でも塗るように白粉をなすりつける。

八木―謡曲「三輪」の「又常閑の雲晴れて。日月光り輝けば。人の面白々と見ゆる」の文句取り。

朝帰り人のおもてもしろじろと　拾四・30

人の面もしろじろと息子不首尾　三一・13

西原―贅。白々と夜も明けた様もあろう。下女の面の黒いことから、一層効果的だ。

岡田―同。

146　**気あかりがしたとにしめのくずでくひ**

清―「気あがりがする」とは、どんな場面に出たためであろうか。家に帰って、にしめのくずで食事をしたというのだから、ごちそうが出て、なおかつ興奮するような場所だったのであろう。祝言のような場合か。

八木―婚礼の後始末、お産の後などであろうか。お産の後はみそ漬の句が多い。

青木―祝言の仲人の様に思えるが……、現代風に云うなれば、宴会の幹事などが。

西原―来客が帰ったあとの、亭主を除いた家人の言。

入江―芝居か花見の留守。重箱の煮しめ。

くじ弱い下女にしめのくずで喰イ　明三・仁4

もし降らば芝居にしなと重へ詰め　二七・6

「気あがり」は「気疲れした」、現代の若者の言葉をかりれば「頭にきた」にも通じよう。その内容は、重詰の献立への配慮、前夜からの準備の気苦労、花の朝の天候の心配などであろう。

岡田―入江説のように花見の朝。みんな出かけ、留守番の下女たちの言。

147　**とんだ雨だと瓦師ハ大さわぎ**

清―宝井其角が三囲稲荷で雨乞をして、句を詠んだという故事はすでに有名である。この向島あたりには、瓦師が多かったが、突然降り出した大雨に、乾燥させていた瓦を大忙ぎでかたづけなければならない。一方で雨乞をし、一方で「とんだ雨」とは皮肉である。

八木―贅。瓦師は浅草今戸町あたりに多かった。

室山―同。地理を知らねば解けぬ句。

入江―同。其角雨乞の句。

其妙に瓦師も手をぽんと打ち

岡田―諸説の通り。

148 **あゝらあやしや細見を親仁見る**

清―「あゝらあやしや」という謡曲の常套語を文句取りにして、細見を見ている親仁を詠んだ句と考えていたのだが、実際謡曲を見て「ああらあやしや」をさがしてみると、一向に見当らない。「ああら不思議や」という文句は、いくらもあるのだが。他の文芸からの文句取りか。

紀内―贊。『伽羅先代萩』（床下の場）男之助の科白に、「ああら、あやしやな」というのがある。

西原―「ああら」は「あら」を強めた感動であるから、その下にいろいろな語がくる。

鈴木―謡曲の「紅葉狩」にも「あら浅ましや」とあるように「あら……や」が謡曲の常套語だと思う。

室山―「ああらあやしや」は、謡曲の中からはまだ見つけていない。したがって、謡曲の常套句とすることは不可。

岡田―「ああらあやしやな」は謡曲風の常套語と思います。しかし「先代萩」にこの語を見つけたのは紀内氏のお手柄。この方が年代から云って、文句取としては適切かと思う。

119 **びっしょりくさりじねんしやう〳〵**

清―自然薯売りの呼び声。「鬢糸縒り鎖」のような芋の意。それに老人であることを掛けた句。

八木―句意不明。自然薯はいいのですが、「びっしょりくさり」が判らぬ。いもがくさってびしょびしょになったでは句にならない。

入江―「びっしょりくさり」は「びっしょり濡れる」こと。自然薯売りが雨にびっしょり濡れて「じねんじょう〳〵」と売り歩く。

参考までに書けば、当地（長崎）に「濡れくさる」という表現がある。これは雨に濡れる程度がはげしい状態を云ったもので、「くさる」は強調の意がある。

岡田―入江説の通りですが、「くさる」だけでも江戸時代には濡れる意に用いられました。その用例多々あれど省略。

150 **ぼた餅を喰たて首がまわるなり**

清―「ぼた餅」とは、醜婦の異称。そこで「ぼた餅を喰う」とは、人三化七の嫁をとり、百両の持参金を手にしたことをいう。これで借金を返えし、首がまわるようになる。欲に目がくれて牡丹餅喰っている

二二・21

青木―贊。

ぼた餅も砂糖しだいと息子喰い

安七・松2

ぼた餅とぬかしたと下女いきどおり

五・5

岡田―贊。

151 **今夜出た雲があしたハぬたに成**

清―不明。

西原―「ぬた」にするのは一般に「いわし」だから、この雲は「鰯雲」。だから鰯の豊漁。よって、明日は市井に売られて「ぬた」と変じ、食膳で賞美されると。

岡田―西原氏ご明解。

'76 頌春

清　博美
八木　敬一
紀内　恒久
青木　迷朗
西原　亮
鈴木　黄柳
室山　三
入江　勇甫
岡田



菊沢小松園選

日銭追う身にも無限の空がある　松江市　梅本登美也
駐在所一件落着お茶にする
雑草の花はふまれたままで咲く
上下からつきあげられる係長
鑑識ではっきりかつらの毛とわかり
どんぐりころころ童話の芽が育ち　和歌山市　桑原道夫
川原に角の取れない石光る
ビルの建つ広場に虫が鳴きしきる
スポーツの王者見合結婚す
組長の手入れ土足で踏み込まず
夕焼けが消えて孤独なビルになる　名古屋市　大林曲ん手
幸な造花のバラにトゲがない
縛られた掟で嫁をまた縛り
凍てついた夫婦に渡る橋がない
雨だれの一つ一つにあるいのち

お互いにゼンマイ掛け合っている夫婦　柏原市　小谷葉子
もう誰も口にはしない恋の傷
素晴しい一日　日記は白のまま
意地悪な鏡　素顔のまま映り　豊中市　高橋古啓
あきらめた頃より箍はゆるみ出し
沈めるもコルクけろりと浮かび来る
ひとりの神に縋る無数の鈴が鳴る
踏まれても草のこころは地を満たす　三重県　川上富子
繕ろうた笑顔と共に帯を解く
騙す気の涙は拭いてほしくなし
艶やかな色を願いて茄子を漬け
濡れた目へ叱り過ぎたを悔いている　大阪市　小谷清女
遊びない言葉にあくびと肩が凝り
一通の幸せ運ぶ便り来る

存分に秋空眺め心満つ
笑顔って人の心をやわらげる
唐津市　田口虹汀

鵜は綱の有るを知りつつ鮎を追い
何もかも秋と云いたい色になり
プリンスと呼ばれる蜂は美しい
過ぎて見てあれがチャンスと思うだけ
大洲市　宮尾みのり

イソップに今日の私が叱られる
成長をした子に裁きを下される
宝石へさそう手紙の麗々し
老人の村は墨絵のように暮れ
寝屋川市　柴田恵美子

縁起よい夢暮れのうちみてしまい
云い足りぬなやみを友は別の顔
放ったらかしの庭木自分で冬支度
先生と云われ悪びれず油断せず
八尾市　納史葉

旧姓にかえる女に夜が続く
いい話ばかりで無かった今日の風
不信感花へ佇つ日の多くなり
いいのです自作自演の果ての果て
和歌山市　樫村ふみよ

もの好きな蜂が来て吸う墓の花
コスモスもひよわ乍らも風にすね
未だやせる余地あったのか病み上がり
ひと息も許さぬ汗の舞扇
尼崎市　中谷利美

先生の教え守って出世せず
それにしても寛大過ぎる酒の上
夫婦とて言うてよいことわるいこと
身に覚えあるから強いても言えず
竹原市　鈴木かつ子

待つ人もなくたそがれの色を恋い
明るさを素直な嫁がもって来た
抱きぐせをつけてばあちゃんグットバイ
無人駅花も人恋う色で咲き
唐津市　山下勝一

完全看護その中にある不自由さ
名月を背に看病怠らず
お化粧がくずれぬほどに汗を出し
マスコミは寝た子を起すことが好き
姫路市　大原葉香

ネックレスまでくつくつと笑ってる
夜さらけ出しマンションの蒲団干す
やれやれと夕日も疲れた色で落ち
清掃婦ぐちも一緒に掃いており
吹田市　藤原世史春

ストとれば労組骨も肉もなし
失業のもう公園も寒くなり

倒産の蛍光灯まで力尽き
風吹けばコスモスおろおろするばかり
寝屋川市　江口　度

まったけの横のかぶらを妻が買い
待ちぼうけ時計の針は知っている
敬虔な信者で神の灯が見える
大阪市　欄

勲章におよそ縁ない文化の日
タンポポの子孫を残す種がとび
大空を仰げば物価上りそう
橋本市　森脇善彦

バイバイと善人の顔出来あがり
まだ正気親に感謝も出来ている
敗けとない力の限り土の色
備前市　武内雅堂

社長さんだけが規格でないズボン
裁かれる女の足は冷えてゆく
思うほど女の心燃えていず
尼崎市　大垣たもつ

もう少し遊んでもよい空夕焼ける
書いて褒められ　筆でけなされ
炊事する爪の白さをじっと見る
岸和田市　池田香珠夫

妻の手前美人を美人とも言えず
稔り田に三食食べにくる雀
露天風呂時に岩打つ波しぶき
富田林市　中村優

花鋏持つとき女になる尼僧
十円玉つづく限りのアイラブユー
三が日狭い日本が広くなり
新宮市　西尾功

人柄を偲ぶ詩あり曼珠沙華
学園祭若い元気な声が売り
歯にしみる酒も出番の値上げ待つ
高知市　竹崎寛

ほうの花いのちかすかに揺れている
ヤゴトンボ追うた昔がよみがえり
ふるさとはいいな鯨もとれた浜
島根県　松本文子

高い玩具だったとピアノの蓋を閉じ
判った振りして聞いているコンサート
生甲斐などあろう筈なしアンケート
岡山県　池田半仙

毒蛇の轢死に同情などしない
餅好きの餅食う胃なら別に持ち
若い気のはずがメモまでして忘れ
唐津市　三浦ひろ坊

野仏の苔剝げてゆく排気ガス
藪医者の病院だけはデラックス
腕のない医者ほど注射打ちたがり

大和高田市　岸本豊平次

子宝と言うたどの子も光らない
誰にでも言ってる世辞と思う妻
駅までの道みち嫁のことを聞き

青森県　波多だお

手の届かぬとこにいるから懐しい
燃えるものまだ胸底にあり雲を見る
流れ行く雲にも乗ってみたくなり

今治市　渡辺南奉

ピンポンの球は私に味方せず
販売機こんな田舎も人不足
赤い爪叱ることさえあきらめる

豊中市　安藤寿美子

散る時も柳は柳のしなやかさ
化粧品かぶれの女を嗤えるか
平行線手をつなぎ得る距離である

橿原市　西本保夫

ハイミスの嫌いな話し定年後
結局は仕事をするのは平社員
課長飛ばし社員のボクに聞く部長

岡山市　時末一灯

亡父の眼の角度を知った曲り道
冒頭で恐縮あとで人を喰い
一言がいえず別れた大晦日

羽島市　伊藤静枝

菊に会い菊に訣るとのたまいし
荷造りを終えて離郷はたしかなり
灯油の値その他も上がり冬が立つ

八尾市　田中紀美代

市役所にポイポイ捨てる紙を積み
天分と言う弁舌に負かされる
キャンドルの炎に許しを乞うてみる

滋賀県　柚木踏草

抜け道に策と白旗置かれてる
墓地に降る恩怨のない鴉ども
他人撮る偶然という関係で

島根県　谷岡芳枝

親心ボーナス着せて七五三
西高東低痛いところがまた疼き
善人と知ってか鬼が離さない

島根県　堀江蓮露

豊年の笑顔を台風吹きとばし
疼せた人疼せたい人も医者通い
箒目を飾る紅葉の二葉三葉

大阪市　牧ときを

安売りにいらぬものまで買うわかさ
琴の音に昔をしのぶ老の耳
年取らぬ亡夫の写真じっと見る

岡山市　井上柳五郎

筆まめに書いて返事を待つばかり

他人ごとのように不景気を口にする
八つ橋が好きでしたと祖母にふれ
今治市　古野伶人

管理職成る程人相まで変り
立入調査色の違うたヘルメット
気が付けば今年松茸見ずに過ぎ
大阪市　堀口欣一

尼さんがしゃなりしゃなりと虹のまち
本を読むだけに生きてるわけでなし
賞品に明治の顔がほころびる
新潟市　市川一峯

咳払い一つで会議の流れ変え
貰い酒何言われてもごもっとも
もう飲めぬ飲めぬと注いでやれば飲み
八戸市　安田紘

右ならえ夢も鋳型にはめられる
父として漕がねばならぬ視界ゼロ
余り米積んでまた来る秋祭り
尾鷲市　渡辺伊津志

口髭を落せずいる元署長
客慣れた笑顔道程引きのばし
方言に救われている待ち時間
愛媛県　小山悠泉

息切れをかくし初老の一万歩
子に頼る積りはさらさら無い貯金
苦笑いピエロは私でないわたし
豊中市　出口セツ子

冬の月女の嘘を射ぬかれる
無縁墓地怨念燃ゆる曼珠沙華
長療法いつしか我れの笑み奪う
唐津市　岩下照沖

故里を捨てた子のシャツ着て案山子
頼らねばならぬ手摺りの冷たさよ
唐津市　田中三男

二日酔い当分飲まぬと朝は云い
撒き餌する僕には釣れずそばで釣れ
尼崎市　駒村岳麓

悪友の祝電妻に解し兼ね
一歩ずつ前進した子が社を守り
島根県　岩田三和

忘れてはいませんでした年賀状
大阪へとんぼ帰りの小企業
河内長野市　井上喜酔

真心は幾つあっても喜ばれ
同じこと喋って妻に笑われる
和歌山市　松原寿子

傾けてはならぬ心へ鞭を打ち
ちぎれ雲女の夜明けが坂になる
和歌山市　西山幸

昇給の分だけ定年近くなり

悪口が生きる支えとなる余生
倉敷市　高山みどり

大和路の秋を朝朝テレビにて
秋ばらの変り幾人分けたかな
松江市　岡崎雪美

縁談が二つ重なり迷う日々
仕立代浮かすつもりの手の運び
羽咋市　三宅ろ亭

叱責の加速度涙見て緩み
鰤と鱈喰えて能登のよさ詠う
諫早市　江副二牛

ちぐはぐのままで園児のマスゲーム
牧水の詩が呼んでる酒の秋
堺市堺　畑日日子

表札は亡夫のままに〆を飾る
老犬の瞳にごって年の暮れ
新潟県　高野不二

流行となればひきずる服も着る
上役の悪口で飲む酒で酔い
鳥取市　有田鹿の子

エンジンの音で見分ける子の帰宅
亡夫を恋う時は仏間に一人いる
今治市　和田宏

無茶苦茶に当り散らしてなお孤独
雲行きがあやしくなった涙声
寝屋川市　福富隆子

ライガーのハクセイ記録を作るだけ
穂を垂れた稲も紅葉もテレビだけ
弘前市　小山内貞男

ローン終り狭いわが家を広く見る
水害の対策本部灯がともり
今治市　今井松花

団体が去ると素顔になる砂丘
親の恩なんでも食べる胃を貰い
東大阪市　野村白風

今日からは手伝う側に姑が立ち
美容院へ行くにも女化粧する
八戸市　島田昭治

清貧と聞えは良いがもの足りず
一生の不作の妻を労わって
宝塚市　吉田とんぼ

賞に入る菊見あきずに佇つ夫妻
皆知らん顔して通る募金箱
須賀川市　平栗金太郎

整形科他人の鼻になって来る
一つずつ積んで夫婦の道遙か
伊丹市　樫谷漫柳

歓迎の料理コレストロール満ち
子を想う寝息が少し乱れてる
堺市栗　本藤持

新聞は上り新聞紙は下り
竹原市　鈴木かつ子

ふる里に家はなくとも墓は待ち
出雲市　高見鐘堂

運命と悟るあとからこぼす愚痴
泉佐野市　大工静子

母いなくなってふるさと遠くなり
岸和田市　池田露子

島国の内から外からノックされ
羽曳野市　麻野幽玄

この土手にまつわる古い物語り
高槻市　山田スミ子

よそ行きの嫁の声音に腰を上げ
新見市　吉田落猿

田の広さ見せたい菊を切ってあげ
岡山市　船越洋之

謎かけて女とぼけて身を替わし
金になる木はそれなりの手間がいり
君来るを信じ庭掃き紅も引き
追込みの子の宿題へ引き出され
長髪の息子の意見も聞いてやる
夢かけてアクアポリスが浮いている
決戦の跡と思えぬ碧い海
エレベーターで昨夜のニンニク背伸びする
今日はまた違う男と会うロビー
本能は丸い鉄鎖のなかに狎れ
今治市　園部正則

老いかなし相談もなく事を決め
童心にかえり一人で揺れてみる
島根県　安達潮音

同病が慰め合っている弱さ
盆栽にふれる日課を齢という
今治市　伊藤一郎

孫共に歌うて聞かす明治節
コマーシャル歌うて九九は覚えない
今治市　真山国彦

向かい風帰りは押して呉れる風
抑制促成年中水っぽいのを作り
西宮市　朝山千世子

竜年の凧上げせめての運を賭け
文化勲章今年は若いのも混ってる
今治市　原田琲珈里

婦人誌に書いてましたと嫁強気
亥の子唄祖父も歌った同じ唄
今治市　蔦本昌道

悔いること齢を重ねて多くなり
夫婦とも思いは同じワイン酌む
八尾市　覚然坊

駅へ来て心変りがして別れ
火遊びの仕末をつけるに札の束

島根県　飯塚虎秋

点滴へ祈る瞳へ月が出た
反抗期優しい母を歯痒がり

富田林市　奥井春子

うさばらし男は酒に持ってゆき

唐津市　筒井朴竜

囃子座に齧り付く児は食事抜き

鳥取県　加藤茶人

天二物与えガイドの声もすみ

大阪市　花田繁子

沖縄の土産話も物価高

大阪市　内藤ますえ

技術者ですと職人おだてられ

出雲市　藤井晴月

敗北の心くっきり昼の月

鳥取県　福田保子

再会の日取り靴ベラだけが知り

鳥取市　岸本無人

すねてない証拠に貝は舌を出し

鳥取市　勝山紫宏

使い捨て剛染めぬ倭にもう廃れ

大阪市　平井露芳

刑事さんテレビドラマでしか知らず

赤穂市　谷口赤童

今治市　大本バット

出歩いて独居老人今日も留寸

兵庫県　高橋近江

除夜の鐘先ずカレンダーの表紙はぐ

七尾市　松高秀峰

盃をコップに変えて黒田節

大阪市　新川貞祐

病人に明日を与えた茜空

氷見市　早川みつ子

鼓笛隊我が子ばかりを追うカメラ

広島県　原田篤史

戸を繰れば足から冷えてくる世相

大阪市　村島秀村

淀川のむかしはすすきが招くとこ

大阪市　須浦つね

雨音に明日が気になる旅の宿

逸名

シャム猫を飼って近所へ背のびする

唐津市　岩崎実

利殖談相づちだけはうっており

★

以下は河内天笑氏の指導で参加された初心者の方々である。敢えてこの「水煙抄」で勉強していただくため、題を出して作句してもらいました。（選者　菊沢小松園）

堺市　中辻英史

賀状に寄せて

藤村青一

くたびれた靴　靴ベラを寄せつけず
堺市　溝端定好

靴ベラも新幹線に乗っている
大阪市　具志堅興弘

一泊で見たいところを馳けまわり
藤井寺市　長谷川曠

女房より子の目がこわい朝帰り
堺市　斎藤彦光

芸術という名でヌード踊らされ
大阪市　松本光男

一泊が二泊になった帰り道
豊中市　西川幸雄

はじらいをヌードで見せる難しさ
大阪市　中西貞雄

一泊の言い訳さがす胸痛し
堺市　田中博

ヌード集ひそかにひらく一人部屋
大阪市　井上利一

心までヌードとなってサービスされ
大阪市　杉本和久

はすかいに見てるヌードのかぶりつき
大阪市　三木清経

一泊の為に夜なべで服を縫い
大阪市　前田一馬

靴ベラを握って逢瀬ねだられる
大阪市　藤村兆正

一日で帰って妻をよろこばせ
堺市　竹谷益造

一泊で一生忘れぬ人となり
堺市　村上克史

しまい風呂ビーナスひたる旅の宿
大阪市　中戸正宣

ストリップはいそれまでの灯が消える
大阪市　芝村実

楽屋裏子供をあやすヌード嬢
松原市　筒井清

靴ベラをそっと手渡す恋心
堺市　石丸輝和

たてよことヌードを囲むカメラアイ
東大阪市　松本常雄

一泊でもう子供等の顔うかぶ
狭山市　宮田十四郎

一泊で帰るに惜しい旅となり
大阪市　四宮柳芳

一泊を罪の意識で買う土産
堺市　日根野谷正司

靴ベラが無うてハガキで間に合わせ

こんどの公職選挙法の改正で上から下まで、選挙民への粛正や年賀が禁止されて、金のかからない安価の政治屋さんを大量に生もうとするのはよいが、ここが勝負と冷えこんでしまったデパートやその辺の商店が、歳末大売出しで先頭をきるのは、歳暮合戦して消費者の利口にも固い財布を開けさそうと懸命であれば、年賀状ですら去年より十何%も余分に刷って、賀状を奨励して粟よくば十円の倍額で六百億（？）の増収を狙うなど不届千分である。一昔前といえば可笑しいが失明する十一年前までは、わたしから差し出す年賀状は減っていくばかりだった。

それは互いに生きている者の人間関係を大切に、と申せば態よいことながら、何年もなんらかの意味で利用し、利用されても可能な範囲での賀状交換であった。それにしてもわたしだって五十を過ぎてなお詩や川柳にうつつを抜かしておれば、先輩や後輩にも知名度の高くなった人がいるが、そうした人に出して返礼のない場合、一日附の予めの賀状に対し返礼があっても、それが身内の親戚でも、その翌年からは出さぬことに決めていた。逆に一日附の賀状を出すのを減らした先から、わたしの方に届いたので折返し、「早々と賀状をいただき……」云々の添え書きをし挨拶しておくと、翌年の賀状は一日を過ぎた賀状になって、テレコテレコになったりするが、それもいつのまにやら疎遠になって、わたしから出すより受取る方が少く、受取った賀状に其年に知った新しい知己をせいぜい三十枚加えても、最後は百枚までに減ってしまった。

わたしが失明した昭和四十年一九六五年からは、今までの想いをすっかり変え、わたしは家内に古い住所録から掘りおこしてもらえば、わたしとしたことが、母校の恩師や過去に世話になった先輩知己に、年に一度の賀状すら怠っていた忘恩を悔いざるを得なかった。自らの生活にかまけ、なんと不徳義漢かと自分に愛想がつきてしまう。爾来わたしの出す賀状は年々歳々少しずつでも増えても減ることはなく、受取る方の賀状は、わたしのより六、七割方であっても、出すのが増えつつあるからそれだけ受取る方も多くなってきている。だから恩をうけた恩師や先輩から、来ても来なくても、住所が変り返送されて調べても不明の場合は仕方はないが、万一不幸が先方の本人にあっても、その未亡人に賀状を出すことにしている。四十年五十年来の畏友が東京都の有力出版書店から上梓した著書を、盲目のわたしを知って贈られたことなど涙がこぼれる。年に一度の賀状で、しかも主に代筆の失礼を敢てしてもだ。

一昨年の正月屠蘇気分の抜けかけた頃、団地でたった一人の仲良しである同年輩の管理人がふらりと訪れたとき、たまたま机上にある賀状の大きな束を見てびっくりした。なぜなら彼とは比較にならぬ程交際の広さを知ったからである。というのも彼には私の前歴を明した事なく、ときおりの世間話や週刊誌を読んで聞かせてもらったり、ポルノ映画を面白可笑しく語ってくれたりする中老のたわいない猥談に、花咲かす事が多かったからである。そこで彼は頼みもしないのに、お年玉の抽籤番号を見てやろうと賀状を丹念に調べてくれた。彼は公務員を停年退職したが、若い頃左翼運動を少しやったり、多少小説をたしなんだこともあるから十人や二十人位の知った名前は挙げるだろうと、抽籤番号よりも期待をかけていたら、「ヒャー」と頓狂な声をだした。「あんたあんた、これ丸尾長顕やが、あんたこんな人まで知ってまんのか」と開かれたのにわたしは苦笑してしまった。ここでわたしと丸尾氏との出合いについて述べれば当時、丸尾氏が大阪に居た四十五年前にさかのぼる。詳しいことは昨年、東京のある詩の雑誌で随筆にして発表したので今回は控えることにする。その彼氏から今年もテレビ、ラジオに多忙。日劇での激務にかかわらず、月刊ペン社発行の「日本の伝説を書きかえる」の自著を贈って下さったのを大切にしておきたいとおもう。ここで巷間、何人も奥さんをかえたり、ヌードの権威者というのが氏の表看板になっているが、反面この本にみる如く真面目な学究肌の仁であることを、わたしは氏に代って弁明しておきたい。昨年から今年にかけて新人、旧友の出版が多く、出版記念会などたびたびの招待に出席した。そのたびに新人と刺を通じ、久し振りの旧友とも握手したので来春の年賀状はいっそう増えるだろう。年賀ハガキ二十円絶対反対。

賀正
51年元旦
本番であがり
手品の種がばれ　瓢太
関西奇術教室
校長　村田瓢太

愛染帖

橘高薫風選

何足の靴で一生終るらん　青森市　工藤　甲吉
はなやかなお点前わびもさびも見ず
臨済録か一つ・か一つと読み終り　和歌山市　桑原　道夫
恋を知り少女水たまりを避ける
失恋のとき青春だなと思う
太陽の真下でふられている男　神戸市　和田　恭子
月まるし次男も母を侮りぬ
昼の月すすきの私語を聞きもらす
月光に罪無き影は無かりけり　八尾市　大路　美幸
秋天にこびりついてる亡母の雲
イカルスのもがれた羽か落葉踏む　橋本市　森脇　善彦
子に職が決まり天下の論もでる
墓道をゆかば虫さえおおらかな　唐津市　岩下　照沖
曝書中ジイド最も汚れおり
冬の蝶職なき人の来るベンチ　今治市　月原　宵明
絢爛とけんらんとして女老ゆ
憎しみの眼に横顔があるばかり　大阪市　河野　君子
父は一生笑えぬマンガばかり描く
いつからか父の炎は背で燃える　竹原市　三宅　不朽
感情の起伏へ菊の咲きつづけ
鳥影もなく電線もさびしいね　岡山市　行本みなみ

真二つになった心と花との距離
ふりむくと赫い死者立つ赫い夜　岡山県　出原　敬一
樹氷咲く彼の地へ還る古き恋
風暮色隣りも一人らしい咳　備前市　武内　雅堂
眼の中に鷹が降りくる枯野かな
少年の恥らい風に耐えている　豊中市　高橋　古啓
君の眼に少し届かぬ縄梯子
堕ちる陽の緋色に思う安楽死　神戸市　小浜　牧人
失いしものと得しもの坂を越す
闘わねば生きてゆけない風の坂　香川県　三井　酔夢
初老とや大河ゆうゆう日が沈む
犬を相手に独りごとなど言うものか　岡山県　白岩　文衛
ためらいの鼓動は銀の針が打つ
山の子よいつまで海を眺めてる　大阪市　小出　智子
過去を拭う水色のハンカチで
冠婚葬祭多忙な齢になりました　伊丹市　小川静観堂
接ぎ木してみようにも老いらく過ぎたるかも
一生を台なしにされたも老妻のうそ　島根県　錦織　文子
諦めをのせて沈んだレモンティー
少しばかり抵抗も着て新調の　東京都　山根　白星
みつめてる漢字不思議になってくる
コスモスの此処に住みたや無人駅　倉敷市　水粉　千翁
孫へ出る軽さよすばらしい財布
じいちゃんとばあちゃんをほめませている　大阪市　新川　貞祐

在民の筈の旅券に菊の紋
紅葉にも来ると花時来たマイカー　島根県　小砂　白汀
地と交わす蜜語をクロカス洩らすなよ
バイブルにまさるレターを握りしめ　倉敷市　小野　克枝
いびつ独楽カタコト廻るわが家かな
ローソクを何年振りに吹く夫婦　鳥取市　河村　日満
壁掛けに名画とやらでいる裸
下手な句を誤魔化す俳画など習い　新宮市　大矢　十郎
安楽死勝手な事を言うじゃない
善人の前を札束通り抜け　三重県　川上　大輪
鉛筆の芯尖らせてとぼけてる
風を許して放浪の旅にいる　堺市　高橋千万子
封筒の色に似合わぬきつい文
明日という言葉へ訳もなく安堵　八尾市　宮西　弥生
髪型をかえて迫ってくる嫉妬
群集の私に囁く飾窓　豊中市　安藤寿美子
引いて行く波に怒りの色　八尾市　高橋　夕花
あやとりの糸から亡母をたぐりよせ　今治市　原田琲珈里
善人の証拠喜劇と思わない　今治市　大本バット
人生の塗り絵食み出す事もあり　和歌山市　若宮　武雄
のうのうと鏡へさらす疵だらけ　呉市　槇田　英詩

キリストを知らぬがマリヤ様が好き　倉吉市　奥谷　弘朗
出し合って百にする気の夫婦です　貝塚市　野坂つき子
愛のないレターでさらさら書いている　松江市　梅本尋美也
ある時は死と云う文字をいとしがり　鳥取市　勝山　紫宏
わかってはいても風船吹いている　大阪市　正本　水客
割勘にして人妻のよく笑う　富田林市　岩田　美代
みんな皆笑顔でみんな皆他人　名古屋市　大林曲ん手
別々に死んで夫婦の儚さよ　柏原市　小谷　葉子
同じ想いで再会にはふれず　和歌山市　沢山　福水
追いついて見ればまぎれもなく他人　高槻市　若柳　潮花
ビルの底老舗は小さくちさく見え　今治市　真山　国彦
一晩の雪で墨絵の国になり　出雲市　藤井　晴月
煩悩にゆだねよ月に兎いる　尾鷲市　渡辺伊津志
防波堤大きな胸が風を切る　倉敷市　小幡　里風
カルダンの構図で女が冬を着る　堺　市　伏見　茂美
焚火まで掃きよせられし秋の色　倉敷市　能登原白水
師の遺墨一筆毎の余韻かな　今治市　今井　松花
豊作も政府のせいにしてごねる　大阪市　西川　誓二
五臓六腑にまで浸み透る物価高　岡山市　川端　柳子
どんな顔してたらいいの晴れの席　今治市　古野　伶人
役人の落度は税で支払われ　和歌山市　西山　幸
遠い愛からたち棘の身を嘆く　島根県　安達　潮音
つくろった網に大漁の声がする　羽曳野市　麻野　幽玄
夢を追い夢を知らない無精髭　今治市　原田　一風
ボロ儲けしたとは書かぬ立志伝　名古屋市　吉田　水車
聴診器子は医師の顔ばかり見て　京都市　松川　杜的
絵ハガキに雨の日が無い青い空　大阪市　西出　一栄
威風堂々ナナハンをもてあまし　和歌山市　津田　与史
さからわず生きる退屈寒が来る　大阪市　欄　蘭
もっこ担ぐ女の顔に薄化粧　伊丹市　樫谷　漫柳
誰の為でも無く一人残業す　草和田市　池田　露子
適当に呆けて波風立たせない　堺　市　栗本　藤持
失言を本音と言えず頭下げ　尾崎市　黒川　紫香
五歩六歩先き先きとまる赤とんぼ　島根県　堀江　正朗
ひとことも言わずともよし妻といる　島根県　堀江　芳子
花を選る倖せを選る微笑して　大田市　藤田軒太楼
不完全燃焼老いのひびを知る　小松市　馬場　魚山
普段着でいて垢抜けした女　岡山県　直原七面山
海は母波を枕に結ぶ夢　今治市　和田　宏
雲行きへ話題をそらす茶を替える　八戸市　小泉　紫峰
老いの意地売上げのばす店を掃き　東大阪市　竹中　肖二
夕焼けの彩が天地を埋めつくす　東大阪市　竹中　綾女
忘却の道でひろった愛の種　大阪市　宮尾あいき
話相手の夫の遺影も焼けちまい　今治市　越智　一水
先生も子もロボットにするテスト　大阪市　藤田頂留子
パーカーで書いてもやはりまずい文字　和歌山市　松原　寿子
虹かかる東の間の幸と知りながら　今治市　伊藤　一郎
墓参り母の形見を着て出かけ　滋賀県　柚木　踏草
寛大な妻で負けそう誓わない　今治市　葛本　昌道
娘が嫁ぎ言葉寂くなる厨　岡山市　井上柳五郎
七五三晴着決まらぬうちに売れ　大阪市　羽原　静歩
富士晴れて芒の穂まで毅然たり　池田市　杉田絵已子
銀の匙うぬぼれてより錆びはじめ

七月に生れた二男の赤ん坊と先日、半日を過した。全く健康というのか、いわゆる泣き声をきかない。いつも叫んでいる。

「ひとりにしとくな、誰か来てくれ」そばへ行くと声を出して笑う。末頼もしい豪傑にもみえる。誕生の日に贈った句

〝桃太郎思いがけない日に生れ〟

その通り桃太郎にもなり兼ねない。

健康で快適なので笑えるのだろう。笑う以上、赤ん坊なりに快、不快は分るのかもしれない。いや、分っているに違いない。

大人の笑いにある皮肉、諷刺、揶揄、嘲笑、自嘲、勿論そんなもののありようもない。

仏教ではこの世のことを娑婆（シャバ）という。何事も思うようにならぬのがこの世だと言い切っている。自力で辛抱したり、努力したりせよということが必然のようにいいだされる。だが、怠け者の僕には辛抱も努力も苦手である。

日本には「うき世」といういい言葉がある。すぐ頭にうかぶのが浮世絵であり、文学としての浮世草紙である。この「うき世」の「うき」には笑いへ導く「うきうき」「うかれる」という響きが感ぜられる。

だが、始めからこんな考えが出てきたのではなさそうだ。先日入手した『「うき世」の思想』（橋本峰雄著、講談社現代新書）、これは、川柳をやる人には是非読んでもらいたい本だと思うが、この本は『憂世と浮世はつねに表裏一体になっているのが日本人一般の「うき世」観である』という著者の仮説にもとずいて書かれているのである。

「うき世」の起源は憂世から初まるものらしい。今までぼうっとそうかもしれぬと思っていたものを、この本ではっきりそれをたしかめさせてくれている。

憂世とはうれいの世、嫌な世ということになる。思うようにならぬ中で一番はっきりしているのは死ぬことであった。古代人もこれには逆えないと覚悟をしている。そして死者がどうなるとか、何処へ行くとかいうより、死霊の恐れの方が強かったようだ。

それがどう浮世へ変っていったかということを著者は刻明に追求している。そして、浮世という発想は中国の荘子にありとする。ここでは浮生といい「フセイ」と読む。その意味は「はかない人生」ということである。憂いからの厭世観が浮世と変り享楽思想に転じていく課程の追求をしているのである。

日本人の心に仏教が入り込むと、火葬の煙からも夢の世界が展開し、愈々逃げられぬとなると、俄然それに逆うように、どうせ渡らねばならぬ憂世なら、その上に大の字に寝ころがろうと不逞化する。そうして、「浮」に「憂」が変っていくのである。

つまり「憂」からの遁走である。

この遁走には二種が考えられる。つまり芭蕉型のものと、西鶴型のものである。芭蕉は花鳥風月を友としながら、ものの哀れを感じ、人を理解しようとする努力を交えながら、超世間を憧れる。いうなれば空即是色の世界である。勿論一種の逃避。無常なる故浮世だという。西鶴はこれとは正反対、色と金の世界から出発しながら、現実意識に眼を背けず、その中に秘む自然の節理を発見しようと努める。それも、これも、一つの弱い諦めで、はっきり逃避に違いない。芭蕉は立前としては格好のいい花鳥風月を追いながら、本音は醜い欲に弱り切っているのが気の毒にさえ見える。

庶民はむつかしいことは嫌いである。西鶴の方がとっつきがよい。

短歌が連歌となり、俳諧になる頃には庶民も加わって、この逃避の一翼を担っていたの

ゆーもあについて

うき世

戸田古方

でないかと思われる。したがって、その俳諧から生れ出た付け句にも、その付け句から転じた川柳も同じような目的に奉仕したものかもしれない。

古川柳以来川柳人は短い句の中に生命をもり込むために十分な観察力を持ち続け、客観的な把握に馴れてきた。

関西弁に「てんご」という言葉がある。この本で「転合」という熟語がでてきた。その意味として「ふざける」とある。あほらしいことをしたり云うたりするとき、関西人は「てんごいうな」とか「てんごするな」というが、この幼馴染の言葉が堂々と熟語になって出てきたのは嬉しかった。

庶民は生きていく憂いを、転合として受止めようとした。いわば憂いを忘れるための遊びを遊ぼうとした。

多年人を教える仕事をして来た私として、学校というのも、学ぶところでなくして、遊ぶところだと思う。遊ぶというと誤解を受けるかもしれないが、遊びながら考えていく、つまり教養というものなのだ。学歴を重ねるということは、こうした遊びの中に考えを深める時間を持つことだ。これがあらゆる波風を防波堤のように跳返させる余裕を与える。

しかし、これら二種の逃避、幽玄や粋にまで展開する転合、つまり遊び、いわゆるこの浮世はあくまで憂世から体を辷しているだけで、憂世の解決にはならない。

川柳の笑いはそんなところに止っているべきではないと私は思う。

憂世から脱するのに、もう一つの方法が残っている。浮世を否定し、むしろ憂世を肯定することである。憂世の実体、それを憂世と観ずる人間の実体、正体を徹底的に探求することである。厳正に些少の誤魔化しも許さず自らを見詰めていくことである。

憂世を浮世と逃避するのではなく、闇黒がそのまま光に満ちた世界に転ずる認識を得るまで追求を止めないことである。これこそ明朗、真の浮世といわねばならぬ。これでこそ憂世と浮世の表裏一体であり、そのこと自身、意義を持ってくるのである。

自らを仮虚と衷心から自覚されたとき、この無実がかくも生かされるこの不思議が喜べてくるのである。

何が満足、何が幸福かといって、感謝の念を持ち、恩報の日々が自らの行動として現れてくる以上のものはない。

古来日本人が親しんできた「いろは」歌に「うゐのおくやま（有為の奥山）」というているが、欲に目が眩んで自己の実体を知らぬ哀れを指している。よく考えてもご覧なさい、欲に目が眩んで、真実を知らず、笑いによって誤魔化そうとしている私の心ほど笑いの対称になるものはない。

有為と観じたとき湧き起る笑い。捨てても捨てても顔をのぞかせようとする有為。私はこの有為を有為と見はじめるとき以上のユーモアは地上にはないと思う。

川柳は考えているより遙かに厳しいものであると思う。路郎先生の人間陶冶とはこのこと自身をいっていられるのである。

中島生々庵・中島小石共著

おしどり作家
待望の句画集

生き乍死

句は八百句にも及ぶ重量感にあふれ、南画のカラーページほか期待の作品がここに開花する。

来春三月中旬発行。



川柳ゆーもあ特集

―同人作品―

（到着順）

雲水の何を急ぐか絵にならず
お祝の電話へ起きて風邪をひき

大阪市　正本水客

銀行がずらり　所得ベストテン
平均寿命が延びて病院が不足する

大阪市　大坂形水

少々はもげても軍歌勇ましい
四ツ玉が明治の指を迷わせる

倉敷市　本田恵二朗

新刊を冗ったカバンの暖か味
顔の効く人に紹介してもらい

鳥取県　鈴木村諷子

着てくもんないからあんた行って来て
大根おろし忘れ電池で抜いてくる生活

氷見市　関美子

音痴まで似たかお前は俺の子だ
地図にない国へ僕でもどうせ行く

姫路市　梅谿庵不酔

孫の手で背中かきかき値切ってる
堂々と胸張り律義平でいる

大阪市　室谷徹舟

日銀は首をふりふり利子を下げ
追いはぎのように電話をかけてくる

守口市　羽原静歩

仲人の一合酒てこれかいな
寛美と同じように口を明け

東大阪市　斎藤三十四

おちんちんめずらしそうにあねいもと
五十九のファイト踊って踊らされ

竹原市　山内静水

国会中継わが一票は眠りこけ
盃を貯めて女にあなどられ

大阪市　本多柳志

口下手に大きな穴を開けられて
その勇気焼酎飲んだせいにする

大阪市　天正千梢

朝顔の欠伸は絶命の合図
春の湖胡坐くずしたようになぎ

柏原市　大峠可動

二度目にはネジを巻かれて来たファイト
さてどれが効いたんかいな痛みとれ

橿原市　岩井本蔭棒

堺市　高橋千万子



ほんとうかと聞けばうなずきうそを言う
ビックリはビックリしない現代の娘
倉敷市　野田素身郎

避難訓練スラックスにはきかえる
共稼コロッケの好きな子に育て
貝塚市　行天千代

嫁貰うて親は一人でほっとかれ
世話やきが飲み屋の付けをことずかり
和歌山市　小川佐知子

髭を剃る顔引っぱられ引っぱられ
判ったような顔して抽象画展見て帰り
島根県　錦織文子

人の世にいい嘘もあり嘘を聞く
女ですものプラン脱線の日も楽し
高槻市　山田季賛

身構えて見たがやっぱり止めにする
言うだけ言えば吠えたなあと言われ
高槻市　福田丁路

奥さんが智勇兼備という家庭
曰くありげな孫の親切
生駒市　草深酔升

蛙の子蛙に似ててありがたし
じいちゃんがメンメンしたとまねて見せ
出雲市　原独仙

情夫だけが潜る裏木戸コソが入り
東大阪市　落合思月

肩入れをした娘がサッサと嫁にゆき
珍客へ不貞寝の妻がとりみだし
八尾市　古川鶴声

明日発って泣かせておいてそれっきり
奥様に叱られますよと付いて行き
島根県　堀江正朗

落ちつけば邪魔にされそうコップ酒
二日酔いきまりの悪い妻の前
島根県　堀江芳子

慰め合うておかしなおかしな日が暮れた
病後のあせりを笑う昼の月
岡山県　直原七面山

さっと汲んだバケツで目高が今日は
仲人の口にかかればみな美人
大阪市　西出一栄

押し問答孫の行司で勝負なし
毒舌へまだまだ元気とご挨拶
伊丹市　小川静観堂

初恋が生きてたら傘寿かも
本願寺出雲大社をハワイで済ませ
倉敷市　小幡里風

鍵穴を窺けば向うも覗いてた
アリバイがばれそう煙草の火がさかさ



久々に逢えば夫婦も仲がよい
臍曲り叩けば釘の方も拗ね

和歌山市　沢山福水

炭小屋で上野殿は風邪をひき
八艘を跳んで義経疑われ

大和郡山市　森田カズエ

買えもせぬ売約済がこうも惜し
うれしくて可笑しくて息子の髭である

富田林市　岩田美代

野次馬を二つに割って消防車
二号への疲れも交る顔の皺

岡山県　出原敬一

引き算が下手で無駄足ばかり踏む
また一人猿に食われに嫁くおんな

島根県　小砂白汀

横顔が似ててスナップ怪しまれ
縄提げて来たのに枝ぶり見当らず

大阪市　中川滋雀

美人の傘に遠慮で濡れるあほらしさ
妻と児のキッスに妬けて夫若い

呉市　槙田英詩

勝負とは別にミカンの皮をむき
二三人タクシー下りるにぎやかさ

名古屋市　吉田水車

人間の顔にも春と秋があり

倉吉市　奥谷弘朗

鈴木生仏

これもう云うたかと聞いてから話し

大阪市　本間満津子

福祉行政手袋片方足袋片方

犯人のように妊婦に連れられて

大阪市　川口弘生

何時の間にか安全牌になって居た

祖母と孫さからいながらよく遊ぶ
老夫婦きょうもど忘れなすりあい

宝塚市　傍島静馬

吸いガラの火がころがってゆく寒さ
膝に抱く猫の温みももう師走

高槻市　若柳潮花

おトイレの壁に名器が巧みなり
おとぼけへさよかさよかととぼけてる

西宮市　若本多久志

遅刻して中座ふたりのスケジュール
ガム噛んでお経リズムに乗っている

倉敷市　水粉千翁

交渉は一任しとく安あがり
ポケットが貰ろうてしもうた押し問答

兵庫県　河原みのる

尻に敷けそうに見えたか遠慮せず
役得で腹の痛まぬうなぎ喰う



当選をダルマ片目で待っている
岡山県　横山一声

草の種モンペの尻で運ばれる
金包の重さでお経の声かわり
倉敷市　藤井春日

馬鹿の字が上につくほど真正直
部長さんのピントはずれもご愛嬌
岡山県　浜野奇童

妻と子が待つボーナスを頂戴す
先生を海に沈める策を練り
京都市　都倉求茅

デブデブのポリさんあれで犯人追えるかな
眺望へみな本尊へ尻を向け
藤井寺市　西いわを

怠けものの台風もありホッとする
おや亀が転び子亀を笑えない
岡山県　白岩文衛

大晦日夕日をほめて叱られる
二次会を出る時帽子まだあった
東大阪市　竹中肖二

貫禄の腹へゴム紐きつすぎる
無茶ばかり言う孫大物かも知れず
東大阪市　竹中綾女

ローン済んだ余裕は嫁ぐ娘が淡い
親分が威張ると子分までいばり
柳井市　弘津柳慶

始球式一寸とバッターも面喰い
清き一票哀れな程の頭下げ
出雲市　尼緑之助

これぽちの定期利廻り聞かされる
湯かげんは浄土の近い大欠伸
新宮市　大矢十郎

宿の膳刺身が見える鉢の底
のろけてる口へ床屋の蒸しタオル
倉敷市　能登原白水

炊事番隔日主義の嫁姑
麗人の横に坐って落着けず
和歌山市　野村太茂津

キッスから離れ俺を見て嗤い
寝顔つくづく性善説は信じよう
神戸市　仲どんたく

入りにくい門だが虎の帰巣性
止まり木で風邪欠勤飲んでいる
和歌山市　津田与史

梅一輪咲いた元旦目出度がり
初日出おろがむ吾が家辰五人
泉大津市　村上春巳

元旦は犬にも用が無いらしい
三カ日貧乏性がうずき出し
高知市　川竹松風



さし向い男困った顔をする
母さんに出世払いの額がふえ
八尾市　大路美幸

大気汚染鼻毛の言い分聞かされる
子の値段知らずニシンは泳がされ
島根県　大森孝華

孫の数定員オーバがUターン
髪染めてカンザシの赤　女です
神戸市　小浜牧人

野の仏恋のふたりへ目を瞑り
首の鈴が鳴り二次会の義理を欠く
加賀市　細呂木魯木

世渡りへ厚顔無恥の意識して
お見合もゲームと割りきる現代娘
倉敷市　稲田豊作

久し振り逢えば二号を連れていた
笑えない顔で葬儀屋よく稼ぎ
大阪市　神夏磯道子

正直で訛りなかなか抜け切れず
楽しげな祖父わからない壺いじり
守口市　村田瓢太

大穴を狙い大穴あけて鬼
迷うた挙句結局始めの柄に決め
大阪市　児島与呂志

すれ違いざまに女の背を見上げ
岸和田市　葛城伊三郎

何故棒に当るか犬は腑に落ちず
大器晩成八卦の云うたようにならず
兵庫県　遠山可住

宝くじ大方合うて寒うなり
ピンカール十一時ごろ起きて来る
大阪市　西森花村

リミットを気にせず噛じる親の脛
生けるもの金も女も逃げるもの
和歌山市　内芝としよ

年などを云うなとカツラで洒落れて行き
コマーシャルおむつのお尻がフラダンス
鳥取市　大塚豊生

不美人の持つ愛嬌を見逃せず
酔ったふり上手になって下戸で済み
松江市　中川晃男

太るのはこわいが何でもおいしいの
秋の酒沁みてくるべき歯も入歯
今治市　月原宵明

かま元を倒産にしてからつ市
七人の敵へ光らぬ靴磨く
岸和田市　福浦勝晴

時計ばかり気にしてチビチビ飲む師走
またチョイ借りしにきたらしい下駄の音



四十の抵抗せめて白髪を染めようか
妹の恋を妬いてる嫁きおくれ
大阪市　飛田好一

つまみ食い見られた猫におすそわけ
時々は夫に云えぬ夢を見る
大阪市　宮尾あいき

占い師自分の病気が出てあわれ
アルバイト今日は共産党へ行き
東大阪市　山川阿茶

時折は接点もあり長電話
アルバイト僧に灰皿所望され
堺市　久米奈良子

下戸の目に泡が勿体なくも溶け
三木さんの落ち目　焼芋屋が包み
西宮市　藤井一二三

老人が前に立ったで目をつむり
優越感腹はフイゴに似て動き
大阪市　藤村メ女

ライバルが赤にしたので白にする
思い切り石を蹴るにも石がない
大阪市　河井庸佑

脱皮したようにズボンが脱いである
食欲がないとは言うたことがなし
大阪市　小出智子

題名が付くと構図もそう見える
手切金出して償いしたつもり
大阪市　金井文秋

退屈な女が食べてばかりいる
気がつけば夢中で円周駆けていた
大阪市　河野君子

春の精夫婦に手などつながせる
もう妬かぬ妻になってる真珠婚
大阪市　柳原静香

嫌いな服で今日は他人の顔をする
姫鏡四十の顔を拒絶する
大阪市　高橋夕花

剣を振る息子に期待かけてみる
千鳥足ビルの谷間をよくぞ抜け
竹原市　森井菁居

初対面うわ気の相手とは知らず
こぼすだけこぼして耳の遠いひと
大阪市　浜田儀一

肩書きが大上段に云うてくる
ささやかれ聞いたなんでもない話
岡山県　竹内翁童

神仏キリスト様も呼ぶ断崖
金一封　さぐってみたいのも人情
岡山市　川端柳子

寝ころんだ姿で海老は揚げられる
飲まねば楷書　飲むと草書になる女
大阪市　不二田一三夫

・同人吟・

秀句鑑賞

——前月号から——

川村好郎

文鎮となりきる妻の癖愛す

能登原白水

文鎮は紙、書物が風に散らないように、書く人が容易に書けるように助けるおもしになる文房具で、近頃は余り見かけないし、使う人も少い。それ程文鎮になる妻も少くなったのであろう。文鎮は決して粗末なものでない重味もあり玉石金属で作られている。これが新しい川柳だと誇示する人の句に途方もない言葉や品物をさがしくっつけて私のような回転のにぶい頭を悩して下さる。この文鎮は余り川柳に使われてないが、実に適切なこの句を光らせているものと思う。

いそがしい仕事いそがしい男に頼み

塩満敏

面白い皮肉なとこを捉えている。なぜ自分だけ忙しいのかしら、ひまな人があるのにと不平も出るが、それだけ信ぜられ頼み甲斐の働きの出来る人である。神様もこの者こそと目をかけて下さっているので逃げずに分を果そうではないか。

山彦は素直に馬鹿と言ってくれ

松下梁水

他人は馬鹿な奴だと思っていても馬鹿と云ってくれない。むしろ肚とは別に褒めてくれる。つい自惚れてその気になって折角の反省が消されてしまう。本当に叱ってくれる人を持っている人は倖せである。山彦を詠んでいるこの作者の不断の精進を讃えたい。

水さびの浮きし澪なり余生かも

天正千梢

黙々と作句しつづけているこの作家ならこそリズムもよく無駄なくまとまったこんな句が生み出されたのであろう。余生かもと結んでいられるところも自省となり、見過しやすい情景から得難いものを発見している。

諍いのあとを烈しく髪洗う

高橋夕花

女性心理殊に失礼だがこの作家の気性がよく出ている。烈しくがこの句の命であろう。この作家メキメキ腕を上げてこられたが所謂作り上げた技巧の句の外にこんなあなたの句も忘れないようにして欲しい。

闘病のそれでもつくる秋の服

西出一栄

今療養中のこの作家は本社句会だけでなく嘗てよく出席された句会へいつも投句していられ、しかも常に何かを求めていい句を作っていられる事に私は頭が下る思いがしている。それがこの句に出ていてどうぞいつまでもお元気でと申したい気持になる。

ようお疲れさん自動販売機

宮川珠笑

ストばやりの昨今、二十四時間ぶっ通しの勤務、さぞ疲れることであろうと感謝しているので、こんな気持ですべてに接したいものである。自動販売機も黙っていずに、せめて「毎度ありがとうございます」ぐらいの録音テープでもよい流して欲しいものである。

誇りたい話題は老父母だけに向け

林瑞枝

路郎賞を獲得するとそのあと堅くなって作句しにくくなるものである。しかしそうならずに淡々と素直に詠んでいてうれしい。誇りたい話題を誰かに聞いてもらいたいが心から喜んでくれる人は少い。老父母ならこそ自分のこととして喜び激励してくれることであろう。

愚痴いうて甘えてるなと自省

西いわを

下句の自省で結んでいられるとこがよく、平凡を脱出している。こんなところにベテラン作家の腕が見られる。

・水煙抄・

秀句鑑賞

——前月号から——

渡辺暁童

「平明にして余韻ある句を心がけてほしい。そのためには物に対し謙虚でなければならない。——後略」

ここで「毎号の川柳塔のあんたの句は平明ではない」と七、七の句に対してシッペ返しが来そうだがこれは私の言葉ではない。

昨年十一月二十三日松山で、子規顕彰第十回全国俳句大会の席上ホトトギスの主宰高浜年尾先生の所感の一節であり優秀句に

客ありて夜なべの手順狂ひけり

（北条市　篠原　正人）

外が地方紙に出ていた、実に平明である。

私は平明、余韻の句は全面的大賛成である。でも平明が同想句、類句の域を出ないのは取らない。

敗戦、復員後生れ故郷にひっこんで三十年川柳的刺激も甚だ過疎的環境の老生に秀句鑑賞のご指名とは実に人を得たとは言えないが今生の思い出に八十一行を埋めたい。

へたな評などより水煙抄前月号中渡辺暁童の推せん句はと列記した方が良いとも思うので佳句推せんの型式で参ろうと存ずる。

歩道橋秋は淋しいもののうち　本庄快哉

秋に咲く桜をふいと憎くなる　小谷葉子

空っぽの回天木馬耳を立て　岩下照沖

歩道橋に秋の淋しさを見つけ、狂い咲きの桜を憎いと見、回天木馬しかも空っぽのそれの耳に一句を得られる都市的感覚に羨しさを感じる。

逃げ出した亀は笑いの内にいる　船越洋之

つぎはぎの襞それでも子は素直　大林曲ん手

師走のいそがしさの中で川柳塔誌を読むだけの立場におかれた時私はこの秀句をうっかり目読に終らして味読とまで行かなかったかも知れない。私はこの二句を感謝をもって高く推したい。

文楽の魅力を青い目に説かれ　池田露子

よろめきの番組はもうあきました　堀畑日日子

川柳は作るが柳樽など見たことはない。岩波に文庫本がある事さえご承知ない仁があるときく、映画監督で歌舞伎を知らないのが居るそうだ。先日のテレビでアメリカの留学生の男女がかつらまでつけて金色夜叉熱海の海岸の場面を日本語でやった。むしろたどたどしい彼等の日本語があの有名なセリフには向いているとさえ思えた、川柳に映画、演劇の分野がもっと詠まれて良いと思う、知らない、判らないでは甚だ残念。

這えば立て立てば歩んで寄り付かず　岸本豊平次

自家打ちのうどんが冬を連れてくる　高橋近江

余技のように採のおむつを換えてやり　小林文月

再会を約す電話の声がぬれ　樫村ふみよ

歩んで寄り付かず、冬を連れてくる、余技のように、声がぬれ詩性云々の声を良くきくが私は先輩の言われた「川柳は川柳である」の気持ちからこの川柳らしい表現を高く買いたい。

ゴキブリよお前空巣を見たんやろ

水たまりそんでも雲を映してる　安藤寿美子

この作者はと考えている内五十年度川柳塔賞受賞作家だということに気づいた。

昭和初期松坂倶楽部川柳講座で麻生路郎先生のご指導によって今日ある戸田古方さんの手ほどきを受けられたこの作家にしてこの句あり、いつまでも佳句を見せていただきたい。

この頃の各地大会は百五十人も二百人も集まるのが普通だが課題吟では目を見張るような人の雑詠が余り目を見張らさない場合が多い、雑詠でも好作家であってほしい。

百人一首と川柳 (19)

富士野藤馬

五八　大弐三位（だいにのさんみ）

ありま山ゐなのささはら風ふけば
いでそよ人をわすれやはする

この歌は「後拾遺集」に「離れ離れなる男の、おぼつかなくなど言ひたりけるに詠める」と詞書してのせられてある恋歌である。

大弐三位は、名を賢子（かた）といい、父は藤原宣孝、母は紫式部（五七）。正三位太宰大弐高階成章の妻となったので、そう呼ばれていた。年少の頃、上東門院に出仕し、祖父為時の官名によって「越後弁」とも称した。藤原定頼（六四）に恋われ、のち藤原兼隆と結婚して、後冷泉院の乳母となり、また他にも恋人があったようで、長生きをしたらしい。「狭衣物語（さごろも）」の作者であるとも伝えられている。

この前に、母紫式部があるので、

兄弟も親子もならぶ百人一首　シクト（三六32）

―兄弟は行平、業平
両脇に月の出ている有馬山　木賀（六六1）

―次の赤染も前の紫女も月を詠んでいる。

五九　赤染衛門

やすらはで寝なましものをさよふけてかたぶくまでの月を見しかな

この歌は「後拾遺集」恋の部に「中の関白、少将に侍りける時、はらからなる人に物言ひ侍りけり。頼めて来ざりける。つとめて、女にかはりて詠める」と詞書して載せられてある。「中の関白」は、藤原道隆のことで、「つとめて」は早朝ということである。そしてこれは、妹のために詠んだ歌である。

紫式部（五七）も「夜半の月かな」と詠んでいるので、

京染と江戸染百で月をよみ　錦鳥（三三37）

と京紅と江戸紫とに洒落て二人を表わし、

赤染も紫もある雲の上　冬野（一一九20）

赤ぞめと式部ならぶと色がさめ　（安八礼11）

―紫の朱を奪うという

京都では衛門江戸では式部也　文集（一三34）

江戸染も京染も入る百人一首　扇鎖（一八17）

赤染衛門は、赤染時用の娘となっているが、実は平兼盛（四〇）の娘であったとも伝えられている。父の時用が、その頃衛門尉であったので、その官名によって「衛門」と呼ばれたのである。

女でも赤染ゑもんじくねた名　（明元松2）

はじめ、藤原道長の妻倫子に仕え、またそのむすめの上東門院彰子にも仕えたようである。後に学者の大江匡衡の妻となった。曽孫が有名な大江匡房（七三）で、匡房誕生の長久二年（一〇四一）には、その産着を縫った歌があるから、それまで健在であったことになる。その時は八十余才であっただろうと思われる。有名な「栄華物語」の作者であると伝えられている。それでまた川柳は、紫式部の「源氏物語」とを並べて、

源氏は江戸染栄花は京の染　松歌（九七2）

紫女赤女虚々実々の物語　乙（一二〇30）

ぬれ事は源語栄花は実事師　杜蘗（九一10）

赤染の栄花はさめぬ物語　山笑（六三20）

―栄花は藤原道長の栄華を書いたもの

霜月の御堂も栄花物語り　柳下（一一一40）

―道長は御堂関白といった―御講

またその名に洒落て、

赤染の夜具も栄花につみかさね　風松（九二38）

―吉原の積夜具

老人に赤染衛門あげられる　浅頁（一八42）

―新造

赤染になると衛門を樽へつめ　二豊（一二〇19）

―柿

りん病のくすり赤染衛門なり　（安八梅4）

百人に痲病の薬一人あり　五友（四五23）

―月経中の交接はりん病が治るという

歌の文句をとって

あげぽしはかたぶく迄の月をみる　（給四24）

家やしきかたぶく迄の月を見る　菅頁（三四26）

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (76) 三四五二―四
夜間 (76) 四四〇八

建つ

堀江芳子選

細腕で支店も建てた未亡人　バット
家建てる積りの金が目減りする　綾女
飲んでさえいなけりゃ今頃倉が建ち　好一
頂上に何かが建った光るもの　暁明
マイホーム建ててローンで四苦八苦　国彦
田を売った金で豪華な家を建て　肖二
真ん中に墓地を残してビルが建ち　本蔭棒
退職金息子と住める家を建て　道子
見守ってもらう頌徳碑を建てる　千翁
場末のアーケードくの字に建ちあがり　貞祐
建て替えの大仏殿に冬追る　福水
手付金だけで建てます不況です　翁童
故郷へ建てる積りの土地を買い　悠泉
区画整理まってましたとビルが建つ　無人
不況と云うに御殿のような家を建て　春日
建つ予定父母に知らせる便り書き　実
公害を案じる高架建ち捗み　正彰
文化財千古の歴史いまも建ち　秀峰
増築の離れは母の城となり　カズエ
城下町イメージ変えるビルが建ち　豊生
人徳の句碑は岬の景に建つ　祥月
犬小屋が建って日曜大工飲み　紘
建て売りが売れないまま年を越し　思月
家ぐらい持てと広告せきたてる　可住
どうしようもない悲しみが地蔵建て　松花
被災地にひっそりと建つトタン屋根　代仕男
建つ家の月賦で風邪も引いとれず　木魚
ラブホテル神社見あろす場所に建ち　登美也
過疎村には過ぎた公民館が建ち　七面山
ローンの名で吹けば飛ぶよな家が建つ　右近
借金で建つ棟上げも景気よし　不二
建て売りの木造工事ちゃちなこと　正則
建立に浄財と言う寄附集め　幸
黒い噂の中で議員の家が建つ　素身郎
しめ張ったままで不況はまだ建てず　宵明
子の居ない夫婦老人ホーム建て　一郎
建つビルへ待ったをかけた日照権　軒太楼
ビルの建つかげでのれんを守る店　魚山
祝福の拍手の中に句碑が建つ　弘生
人は皆手品のように家建てる　登美也
ビル建ってうちの太陽持って逃げ　洋々
建て増しでおろそかになる非常口　バット
佳はよ建ててよかったなあと物価高　弘生
借金で建った家にも取得税　柳五郎
クレーン車がおもちゃのような家を建て　奇童
補償金村みな派手な家を建て　香珠夫
建設が進み緑が逃げてゆく　水客
人ぜいたくな悩みは建てる向きでも　茶人
地借金で建った二階に見下ろされ　可住
天木遣り歌秋天高く棟上がる　どんたく
軸お茶室の建った自慢で客にされ　一風

起つ

河村日満選

禁煙の一念発起もうくずれ　カズエ
殴り倒しても殴り倒しても起つ不気味　度
茶柱を啓示と信じ起つ決意　右近
式典の起立明治の背筋伸び　茶人
マヒの子が起った祝いのお赤飯　弘朗
半年のベッドを降りて起つ社会　隆子
富士山が見えると聞いてみんな起ち　国彦
思い出の写真旅行を思い起ち　翁童
伝統を守る意気私財なげて起つ　天人
中ピ連金切り声で起ち上り　本蔭棒
鉢巻で起つ追い詰められている　里風
釜ケ崎に住んで起つ気を喪失し　七面山
労組の起つのが遅い空手形　魚山
美しい寡婦にいつしかたつ噂　肖二
薩ロが聞こえて昼寝起ち損ね　バット
待ち人は来らずベンチやっと起ち　一風

吟題課

声明がおくれて起った全国区　暁童
起つ構え見せて上目で虚を探る　露杖
東海の島割る如く朝日起ち　どんたく
肩組んだ若さまぶしく起ち上がり　柳子
今寐言いったのがふと起ち上り　宵明
原案へ補正予算を組んで起ち　宏
原点に起って想を練り直し　好一
総起ちの中に吸い込むホームラン　白水
七転び八起きを妻に支えられ　悠泉
日の丸を起ててゆっくり寐正月　暁明
議会なれしてきた首相すぐに起つ　無人
山に起つ男の胸に嘘がない　可住
にんにくの匂い座席をそっと起ち　道子
超高層街の墓標のように起ち　香珠夫
後遺症再起の心もて遊ぶ　鶴声
静止する湖面に風を起てる人　幸
身に覚えないから受けて起つ構え　軒太楼
迎えうつようライバル立候補　昌道
奮いたつ割に足許頼りなし　漫柳
七転び八起き奮起の屋台引き　暁風
一歩早く起ったばかりに孤立する　素身郎
起立して以下同文の賞を受け　洋々
通信簿奮起のあとがにじんでい　祥月

佳

決然と起てば裏切る友も居て　代仕男
疲れきる妻をおこさずベルへ起ち　芳子
起ち上りそうな寐棺へ菊を積み　豊生
疵うずく日もあり八起きした余生　武雄
義に起って男裸になっている　千翁

人

再起する男心へ虹が立ち　福水
地
鶏頭を歩哨に起てて墓静か　宵明
天
朝礼へ起つ少年の指が伸び　奇童
軸
孫抱いて遠いはなしに聞く蹶起

発つ

不二田一三夫選

宮尾あいきさん宅が昨年10月29日類焼――その後片づけなどで多忙のため代選しました。

初漁へ夢と暮らしを乗せて発つ　潮音
発つ間際やはりいつもの人が欠け　茶人
発ちますとガイドは頭数を読み　正彰
飲み過ぎもいて団体様お発ち　カズエ
農協の旗勇ましく羽田発つ　どんたく
クーポンに追われて雨の中を発つ　重人
羽田発つハネムーナー待つ蘭とレイ　貞祐
羽田発つあとは添乗員任かせ　素身郎
旅発ちへ母のうるさき有難し　暁明
ウナ電を胸に喪服も入れて発ち　洋々
再出発の誓い世間の目が崩し　芳子
顎の紐直して発車の釦押す　紫宏
SLが最後の旅に発つテープ　松花
陳情団発つ駅頭の篶旗肖二
発つ時も帰りも革マル派は騒ぐ　宵明
夜の白み待って捜索隊が発つ　宏
移民船ふり向くように港出る　豊生
謎めいた言葉残して発って行き　国彦
発つ際に恋文らしいものを呉れ　一郎
くじけてはならぬ大志の旅鞄　柳子
こっそりと発つ蒸発の孤独感　祥月
転落のスタート都会の駅へ発つ　照沖
大平椀出発の眉は若かった　みどり
天に問い天に答えて発つ孤独　白水
この胸を空っぽにして汽車が発つ　露杖

佳

出稼ぎに今年も同じ顔で発ち　無人
発つ鳥は追わず女も変えてみる　秀峰
出発へ肩叩かれた重さ知る　千翁
神の火を受けて若者ギリシャ発つ　どんたく
御帽子を持たず羽田を発つ陛下　伶人

人

発つまぎわ女は他人の眼に戻り　優
地
時の顔ずらりならんで羽田発つ　弘朗
天
拿捕される覚悟で北の海へ発ち　魚山

賀正

甚だ勝手ながら年賀状に
代えさせていただきます

福永清造

初歩教室

題 ―「一」―

本田恵二朗

住安氏家訓（健康十則）に私は惚れている。当教室の皆さんに味読して頂いて、皆さんの健康と健吟を祈りたい。

少肉多菜、少塩多酢、少糖多果、少食多咀、少衣多浴、少車多歩、少煩多眠、少念多笑、少言多行、少欲多施、以上の通りであるが、心身が健康であることが佳句を生む源泉となるに決つていると思うし、少煩多眠、少念多笑であるなれば、活気のある明朗な句が生れてくるにちがいないとも思う。

紙一重勝負が決めた泣き笑い　呑歩利
（紙一重で決った勝ちを泣き笑い）
一言の重さを陛下探し当て　伊津志
（一と言の重さを陛下知り給い）
一泊の旅へいらぬもの持ち歩き　柳五郎
（たった一泊の旅へあれこれ重くさげ）
柿一つ天に残してわざとらし　静観堂
（佳き描写振りへ拍手を送る）
一言が多いと母に叱られる　江水
（一と言が多いと母が目で叱る）
生涯に一会の縁が強く生き　寿子
（一会の縁をだいじに強く生き）
渡り鳥下見が低く二羽三羽　茂美
（渡り鳥一二羽低く下見する）
一から出直し誓う嬉しい日　寿美子
（一から出直し誓う目がきれい）
対決と対話労使の紙一重　ますえ
（紙一重が前代未聞のストとなり）
一人者秋の雨わびしくて　つね
（秋の雨独身者へわび過ぎ）
ランドセル買ってもらって一年生　秀村
（ランドセルが歩いてるみたい一年生）
もう一度やり直したいわが人生　失名
（もう一度振り向いたとき街雑沓）　大成
一歩ずつ落葉を供に秋を踏む　同
（一歩ずつ踏めば落葉が話しかけ）
（一歩ずつ故郷の秋を踏みしめる）　幸
たつた一つの嘘が離婚の破目となり
（たつた一つの嘘が縁の糸を切り）
孫一人に家族みな目をまわされる　同
（片言の孫が一家を振りまわす）
子が書いた一にかたずをのむ夫婦　茜坂
（一と書く子の筆勢を追いかける）　同
ほんのりと一口の酒秋深し
（一と口の酒ほんのりと秋深む）
世の移り一家分裂増えた核　貞祐
（ご多聞に洩れず一家が核と散る）
老残の迷いがらすが唯一羽　同
（老残のからす一羽へ陽が落ちる）
大物は一網打尽から逃れ　保夫
（一網打尽から大物だけが逃れ）
（一網打尽小物ばかりが引っかかり）
一言居士じっと課内の隅にいる　同
（隅っこで一言居士が出番待つ）
一寸先は闇だが明日を信じよう　瓢太
一杯の酒が隔てを取り払い　同
（一升瓶が胸襟を開かせる）
ただ一つの生命大事に今日を生き　藤持
たった一つの命背負って老いの坂
われ一人ゆくこのテスト自信あり　同
（自信あるテストへ歩一歩胸を張る）
一旦は誓った心どこえやら　落猿
（一月に誓い二月に忘れはて）
湯加減をみると一番風呂に入る　同
（わが家風一番風呂は父のもの）
もう帰る一番星が呼んでいる　度
（鍵っ子が一番星を呼んでみる）
あめ一つ子供のけんか始まりぬ　同
（あめ一つ子供のけんかの種になり）
嫁ぎゆく娘へ一と言の親心　功
（嫁く娘へ母は一とこと言い添える）
（嫁く娘へ添える一と言血が通う）
一対の茶碗の過去を知りたがり　那智子
（一対の茶碗に曰くありそうな）
（一対の茶碗を家宝にして旧家）
先輩の一言で道誤まらず　同
（一とすじの明りを先輩から貰い）
一言の過言一夜の不眠なり　静子
（一と言が過ぎて眠れぬ夜のとばり）

夢の一字希望にもえた明日があり　同
（夢という一字希望にもえて描く）
一本の菊が部屋を秋にする　三十四
（菊一輪挿して書斎を秋にする）
新聞の値上げ一行で決まる　同
（たった一行で新聞値上げする）
嫁の居ない日が一番の休息日　漫柳
（嫁のいぬ一日ゆっくり骨休め）
差引いて一だけ残るほどに生き　同
一つことばかり小言の老いた母　日日子
一泊の旅老母こよなく喜んで　同
（湯の宿の一夜が老母をはしゃがせ）
ゴマすりがイの一番に手を上げる　昭治
もう一から出直せぬ歳となり　同
（一からはもう出直せぬ歳となり）
老妻と湯豆腐一丁もて余す　無人
旧道で一本松の風を聞く　同
（旧道の一本松が呼び止める）
（旧道の一本松へ湧く童心）
ないものは一か八かの勝負する　正則
（裸一貫一か八かの勝負する）
嘘一つかくして胸に翳りでき　同
（嘘一つかくして胸が翳りそめ）
一流になって動きに巾が出来　軒太楼
一か八かやってみなくちゃ解らない　同
（一か八かやってみろよとけしかける）
（一か八かやってみるのも若さなり）
（一か八か運の扉を開けようか）
一撤の気性を変えてみたい日も　静泉
始まりは一からどこまで続く道　同
（一からスタート果て知れぬ道である）

男の子一人を頼りにくにを捨て　静枝
転宅へ記念樹一本そっと掘る　同
一丁やったるでと独り言　頼次
国宝が一つある寺よく稼ぎ　岳麓
立身の一念バイトの汗を拭く　同
一言居士だから上座に据えておき　翁童
招待状一封欲しい下心　同
口だけは一人前の腥かじり　利美
欠点が一つも無いのが玉に傷　同
なんだ一円だったのかと拾い　道夫
一日が長いと思う靴の底　同
一と粒の飯引く蟻の真剣さ　サヨ
一と言を呑み込み老いの座に耐える　同
一冊の思想に少年ゆれている　洋子
景品に釣られて重い市場籠　同
一を知り十まで知らぬ母で良し　紫宏
なるほどな一にも二にも金次第　同
一か八賭けてつかんだ運である　露杖
さわやかな毒舌憶う一周忌　同
一寸に五分の魂大きすぎ　同
泣き止まぬ児へも一人の僕がいた　薫史
挨拶に一と言多い新社員　同
洗濯機の音もわびしい独りもの　道夫
一族を背負うて父の遠い岸　史子
（一家を背負う父へ対岸の灯遠く）
一本の紐に結んだ細い縁　同
（切れそうで切れぬ一本の縁の糸）
（目に見えぬ糸一本で結ばれる）
一本の道へ二つの意志を持ち　同
（道は一と筋なのに迷う小羊）
一徹の良さを老妻だけが知り　慶彦

年寄りへ一番風呂を遠慮させ　同
さてどこで一杯やろう法善寺　同

題―休―　一月二十日締切（三月号発表）

宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒七一一　本田恵二朗

川柳塔社常任理事会（12月4日）

8日間ブッ通しのスト明けの常任理事会である。12月号は不着、新年号の原稿は未着。常任理事のなかには打撃の甚大な人もいたが8氏も出席した。

多久志氏の会計報告から始まり、ハワイ観光川柳大会の出発が1月20日に変更したことなどが説明される。ハワイ柳人へのみやげに色紙36、短冊40を諸氏が書くのでその割り当てもきまる。

52年5月号で六百号になる。あと17か月間よりないので、宣伝おくれのないよう不二田から企画などを要請。

同人諸氏からもその企画を広く求めることになったので好企画をお知らせください。路郎先生の「旅人」の普及版刊行はどうか。

路郎先生の13回忌に相当する（薫風氏）。とくにかく同人全員で企画をすることになりました――。本号から一部三百五十円に誌代が改正されました。ご諒承のほどを。

出席―多久志・栞・百酒・静馬・生々庵・薫風・一三夫諸氏。

★

「川柳塔の歌」募集！前号参照！

第二百九十四回（五十年度最終回）

大萬川柳「拍手」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　四百九十五句

入選　六十句

拍手頼むよと幹事の眼が合図　藤井寺　吸江

拍手まで計算している選挙戦　和歌山　幸

まっ先の拍手サクラと間違われ　宝塚　静馬

心からの拍手舞台裏も聞き　大阪　誓二

男子誕生妻に拍手を送りたし　東予　悠泉

ある歌手の涙の過去を知る拍手　堺　緑水

優勝の拍手へ肩が重くなる　富田林　維久子

拍手してもらった程に票は出ず　寝屋川　小路

万更でないと拍手に自惚れる　大田　軒太楼

義理でする拍手虚ろな音がする　松原　重人

皮切りの拍手世話やき買って出る　今治　有里

勇退の花束拍手に彩を添え　和泉　洛酔

声援の母の拍手が温かい　平田　代仕男

ライバルへ贈る拍手の手が痛い　大阪　道子

拍手より黄色い声で湧きかえり　堺　天笑

栄転でもないのに拍手で送られる　奈良　保夫

生き甲斐を拍手に賭けてドサ廻り　八尾　美幸

感激の拍手勝者へも敗者へも　神戸　静泉

拍手より餌が欲しくてする演技　西宮　百酒

一線をひいて妥協をする拍手　富田林　花梢

シーズンの苦労案山子にない拍手　呉　英詩

頼まれて拍手しに行く講演会　大阪　満津子

皇后のスマイル国境なき拍手　神戸　どんたく

作業着の父へ拍手を惜しまない　倉敷　克枝

借れるのが拍手をしてる利下げ巾　大阪　貞祐

多数決拍手へ正論もみ消され　鳥取　洋々

ご訪米過去は問わない拍手沸く　奈良　本蔭棒

司会者の合図で仕方なく拍手　笠岡　忠三

喜びの拍手は心の中でする　大阪　好一

芸人の冥利拍手に支えられ　大阪　あいき

入場の無料を拍手で返えしとく　大阪　文秋

拍手忘れる程に魅せられる　倉敷　里風

皆拍手するから僕も拍手する　倉敷　梁水

前の方に坐り拍手に忙しい　兵庫　可住

三割の拍手へ総理しがみつき　笠岡　古庵

半分は育てた母へ鳴る拍手　堺　一舟

羨望もねたみも拍手同じ音　東大阪　美子

世界中拍手で心通い合い　大阪　昌道

お色直しいっそ美人にする拍手　今治　昌道

ライバルへ送る拍手へ湧くファイト　倉敷　梁水

末席へ拍手しに来ただけのこと　満場一致という退屈な拍手

儀礼的拍手下手でも上手でも

馴れ合いの拍手も入れてリハーサル

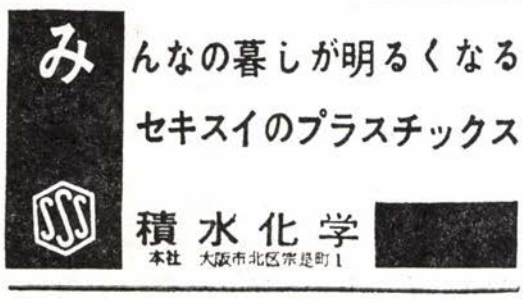
汚れてる拍手に今日も踊らされ

柏手が拍手にかわる初日の出

も一人の僕が拍手の渦に酔い

喝采の中で明日を見失い

ビリでよし父の拍手に応えねば



名セリフ待ってましたという拍手　二
下手なほど拍手が多いかくし芸　三
正論へ拍手したのは僕ひとり　四
尼崎　利美　五
佳　句　六
気の抜けたような拍手に知る落ち目　七
大阪　好一　八
甲子園無言の拍手する遺影　九
今治　正則　一〇
七光り背負い拍手の中に居る　一一
大阪　蘭　一二
手応えの拍手を信じた日の誤算　一三
大阪　道子　一四
権力に媚びる拍手に音がない　一五
岡山　翁童　一三
人ノ句　一四
さあ飲める　そんな拍手とも知らず　一五
大阪　新之助　一六
地ノ句　一七
八起き目も妻の拍手に支えられ　一八
倉敷　梁水　一九
天ノ句　二〇
現金封筒父の拍手が詰めてある　二一
堺　天笑　二二
選者　吟　二三
師匠だけ拍手をしない舞扇　二四

昭和五十年度
ベストテン決定

梅里賞
一　**花梢**　二六、五　富田林

一二三
梁水
美幸
好一
可住
天笑
小路
つき子
利美

残念賞
弥生　一一
敢闘賞
美子　一二
多久志　一三
静泉　一四
吸江　一五
美代　一六
緑水　一七
柳志　一八
牧人　一九
文秋　二〇
洋々　二一
翁童　二二
柳宏子　二三
宵明　二四
あいき　二五
維久子　二六

昭和五十一年度第二回
「倖せ」五句以内

二五、〇　堺
二三、〇　倉敷
二二、五　八尾
二一、五　大阪
二一、〇　兵庫
二〇、〇　堺
一九、五　寝屋川
一八、〇　貝塚
一七、〇　尼崎
一六、五　八尾
一六、五　東大阪
一五、五　西宮
一五、〇　神戸
一五、〇　藤井寺
一四、五　富田林
一四、五　堺
一四、〇　大阪
一四、〇　神戸
一三、五　大阪
一三、〇　鳥取
一三、〇　岡山
二二、五　大阪
二二、〇　今治
二一、〇　大阪
二一、五　富田林
以下略

締切　一月二十五日

第三回
「ムード」五句以内
締切　二月二十五日
投句先
〒593　堺市堀上緑町一ノ三ノ七
藤井一二三方　**大萬川柳係**

第23回　**大萬川柳大会**

日　時　昭和五十一年二月十五日（日）午後一時
会　場　**大萬**（大阪市阿倍野区松崎町三丁目）
会　費　三百円
司　会　西尾　栞
開会の辨　若本多久志
柳　話　中島生々庵
昭和五十年度ベストテン表彰
兼題「執　念」　**藤岡　花梢選**
「次　席」　**藤井一二三選**
「　笛　」　**松下　梁水選**
「売出し」　**大路　美幸選**

「禁　酒」　**飛田　好一選**
席題　二題（当日発表）
選者　遠山可住、河内天笑
兼席題三句以内
菊沢小松園
閉会の辨
ベストテンご招待懇親会
投句のみの方は二百円封入（郵券可、句集代を含む）各題別々に柳箋または便箋に記載の上、二月十三日までに左記宛へ送って下さい。
投句先　〒592　高石市高師浜三丁目五―六　川村好郎
主　催　**大萬川柳会**
後　援　**川柳塔社**

★
▼「**垂井葵水遺句集**」が朝日和歌山版川柳選者故垂井氏遺句集、詩情豊かな秀句の数々―ちょうど3回忌に夫人が出版―という見出しで、朝日和歌山版に出た。
―**太茂津**

夢のハワイ観光
日米交歓川柳大会
日時変更
昭和51年1月20日（火）出発
会場　**カイマナホテル**
兼題
「判　断」
「レ　イ」
「波乗り」
「観　光」
「番　組」
「躾　け」

大萬川柳会
どんぐり川柳会
まるべに川柳会
あすなろ川柳会

本年もよろしく
ご指導のほどを

明けましておめでとうございます

季節料理・折詰

大萬

大阪市阿倍野区松崎町
TEL (623) 5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼近江砂人氏（番傘主幹）は第10回市民表彰に文化部門の功労者として招かれ11月25日大阪市長室公館で受賞された。

▼川柳はこだて12月号は北村白眼子氏の函館市文化賞（芸術部門）受賞記念号。

▼大森風来子氏（川柳岡山社主幹）の句碑除幕ならびに記念川柳大会は本年4月25日に岡山市吉備津、吉備津神社でおこなわれる（詳細次号）生々庵主幹は兼題「散る」の選者として出席される。

▼川柳塔社有志ほかとハワイ柳人との交歓川柳大会へ1月20日出発。この記事は本誌3月号で発表の予定。

▼弓削川柳社（浜野奇童会長・本社理事）は53年度を目ざし、名刹誕生寺近辺など（予定）を〝川柳の小径〟にする案が進められ、その遊歩道に個人負担で句碑を建てる―さすがに川柳の町の企画である。―故福島鉄児氏をしのび「紋土」12月号を増刊号にすると。

▼対流（一行詩型研究・第6号）は山村祐（川柳）津久井理一（俳句）二氏が代表する季刊誌。山村祐氏の「定型の栄え、非定型のこれから」が読みものの柱となっている。頒価三百円（〒別）〒170東京都豊島区北大塚1の33の4、森林書房。

▼川柳こなゆき編集長米沢武氏（43）は昨年8月25日逝去―同誌10月号が追悼号

▼川柳人第五二三号「夢二郎追悼号」を東京柳樽寺川柳会から発行。P156に故人をしのぶ句や文が満載されている。

▼静岡川柳11月号は創刊50周年記念号（通巻四〇三号）定価六百円。

▼こだいら通信第16号（奥津啓一朗主宰）は50年11月25日発行分で廃刊。ご苦労さまでした。

▼備北新聞50年11月25日号に大坂形水選が載っている。―優勝のカープ育てた郷土愛―好郎。このほかに仲田多香史筆「僕の先輩と知己」に秋田實先生との出会いがある。

▼金子呑風氏（上田市）一度上阪して皆さんにもお会いしたいと機会をねらっています。

▼天守閣10周年記念―日和山乙姫荘から寄せ書き拝受

▼**日川協コーナー▲**

▼50年度総会が京都「かんぽーる京都」で12月7日開催。本社から生々庵主幹、栞副主幹、小松園、薫風副理事長出席。

▽同人の動向△

▼若本多久志氏（西宮市）は〝自動車販売ニュース〟へ「時事川柳のたわごと」を好評執筆中。

▼新岡回天子氏（唐津市）は昨年11月29日・30日に川柳展をまた開催された。

▼児島与呂志氏（大阪市）から―交通局の川柳行事もなんとかみんなで協力してやっています。新同人の神夏磯道子さんには牛滝山の句会で初めて会いました。

▼山内静水氏（竹原市）は第37回中部地区（誌上）川柳大会で「裏切り」の選をされる。締切は1月15日。

▼野村太茂津氏（和歌山市）から―葵水遺句集を句会終了後全員で各方面へ発送。なお川柳わかやま吟社では

その読後感などを二枚程度で寄稿してほしいと。

▼嘉数千代香さん（岡山県）は川柳岡山社の第4回日米交歓川柳紙上大会「妬心」の選者となり、ニューヨークの藤村涼子さんらと共に期待されている。投句締切は1月10日、投句先は川柳岡山社同大会係。（投句料三百円）

▼八木千代さん（来子市）から―旧ろう12月14日米子福祉会館で林瑞枝さんの路郎賞受賞祝賀会が催された。いずも川柳会の尼緑之助氏、むらくも川柳会の藤井明朗氏、堀江正朗氏、まつえの七人のサムライ、倉吉市の奥谷弘朗氏、鳥取市の清水一保氏ほか、大賞メッカ、山陰の強豪が一堂に会し盛会だった。

▼河内天笑氏（堺市）は同業の方々と九州旅行中、句会を開き、同行三十数氏に川柳を指導、誌友獲得に当たられた。

▼小出智子さん（大阪市）の令息が昨年11月8日結婚園田に新居をもたれた。

▼沢山福水氏（和歌山市）は11月19日左脚がシビレ歩行困難のため入院された。

▼池田古心氏（岡山市・かがみ川柳社主幹）はかねて入院加療中のところ50年11月29日に病院で永眠。次号へ本田恵二朗氏に追悼文をお願いしました。謹悼。

▼高橋夕花さん（八尾市）は昨年10月25日実母を亡くされた。謹悼。

新同人紹介

西村早苗（にしむらさなえ）
―白汀・明朗・緑之助―推薦

▽旅信△

▼正本水客・黒川紫香両氏から―南九州を回わっています。11月8日―坊の津の夕陽戻らぬ鰹船―紫香。―北緯31度ジャングルのある日本―水客。

▼岩本雀踊子氏は本郷から赤穂から―

▽各地の句会△

▼**第26回新年交歓36題川柳大会**―1月11日9時―広島市二葉の里、広島鉄道職員会館―会費千円（昼食費共）投句辞退。

▼**第10回岡山県川柳大会**（主催・白百合川柳会）は1月18日（日）開催。本社から選者として生々庵主幹薫風編集長、久志良杯の岡村久志良氏、柳話の本田恵二朗氏が出席（詳細前号参照）

▼**堺川柳会**は1月13日午後6時から八木摩天郎宅で開催。題は―玉・直感・昇る

▼**南大阪川柳会**は1月20日午後6時から松崎町大萬で開催―題―プロローグ・腹ずもり・美人・意気。

▼**川柳東大阪**は1月25日午後6時から、東大阪市中央公民館二階第二集会室で開催。題は―宝・花束・数える・チップ（席題一題）

★前号〝秀句抄〟の「忍従の土間にの暗き文化財」は**出原敬一氏**の作品でした。



本社十二月句会

会場　文化会館

八日　午後六時

菊沢小松園氏ご寄贈の「餅焼きアミ」が三才入選者に賞品として贈くられ、新春がそこまで来ている忘年句会のにぎやかさである。

若本多久志氏の柳話は、お得意の文字と言葉である。言葉にはうるさいNHKでさえヘンな日本語がはんらんすると指摘される。

とくに文字においては、われわれ短詩型文学にいそしむ者には欠かすことのできないもので刷り物まで配布しての熱弁だった。

今夜のハイライトはなんといっても月間賞杯の行方であろう。過去11人が一回ずつだが定金冬二氏が永久保持へ大逆転した。

（進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）

出席―**与呂志**・古方・潮花・紫香・水客・蘭・**膺佑**・**喜風**・**正影**・**薫風**・**滋雀**・**文秋**・多久志・**太茂津**・としよ・武雄・与史・道夫・千寿子・勝晴・漫柳・天笑・右近・形水・**瓢太**・**一三夫**・眉水・誓二・静歩・寿美子・**鶴声**・幸生・**葛城**・酔升・三十四・度・**静馬**・**柳宏子**・冬二・好一・**一舟**・**肖二**・**綾女**・**雉久子**・古啓・**儀一**・芳川・祐三・**美幸**・**鬼遊**・**夕花**・**岳人**・智子・あいき・**君子**・一二三・**鎮彦**・吸江・凡九郎・**雀踊子**・栞・弥生・生々庵・**牧人**・**酔々**・小松園・頂留子・**敏好**郎・**葉子**。（**太字は全出席者**）

兼題「舗　道」　　**定金　冬二選**

つぎはぎの舗道が市政のぞかせる　静馬
すばらしい舗道暴走したくなり　武雄
靴の裏ばかり見て舗道はピエロめく　一三夫
銀行と医者が舗道の句読点　漫柳
舗道の下で肩がこってる祖父の霊　度
舗道雨私にロマンス追って来ず　与史
歩行者天国今日は銀杏の散るままに　水客
ウインドショッピングで舗道の灯に染まり　牧人
雪少し積んで舗道の朝になり　紫香
二人三脚舗道の向うに虹がない　水客
故郷は舗道となった風のいろ　花梢
街路樹の陰でわたしを消して行く　古啓
もう一花咲かす舗道に軋む音　維久子
舗道から眺める月に詩がない　幸生
舗道にも休日作ってあげたいな　としよ
舗道まで掃いて明るい幼な妻　右近
冷ややかに舗道はネオンをはね返す　頂留子
試歩の杖舗道が一寸高すぎる　敏
朝の舗道一円玉が落ちたまま　多久志
雑草の意地が舗道を割っている　寿美子
ほんとうの弱さ舗道が知って居り　一舟
舗道を走る墓場から遠ざかろうと　度
死に切れぬ女舗道の灯を探す　弥生
ぎんなんが落ちて舗道は冬の恋　鬼遊
靴音を舗道においてくる別れ　夕花
負け犬になってネオンのない舗道　弥生
哭いているのは舗道なんだよ冬の雨　美幸
人気なき舗道紫色をして　古方
すれちがう舗道に愛が落ちている　智子
私には舗道を歩く靴がない　寿美子
十二月の舗道にすててある言葉　雀踊子
天皇と舗道を歩くイエス様　岳人
舗道には乾いた涙しか落ちぬ　岳人
雨の舗道にたくらみが一つある　夕花
舗道ブッツリ切れて人間始まりぬ　美幸
死者だから舗道を歩くことにする　岳人
逃げる日の舗道がとてもあたたかい　冬二

席題「ぼんやり」　　**西村　芳川選**

ぼんやりの雲の海から富士が見え　敏
冬空をぼんやり見てる二日酔　牧人
朝霧にぼんやり塔が浮いて見え　酔升
ぼんやりと言われた方が金を蓄め　文秋
妻の愚痴ぼんやり聞いてる二日酔　あいき
ぼんやりと風来坊のごあいさつ　静歩
ぼんやりした顔でがっちり蓄めており　酔々
大阪のぼんやり八尾で怒鳴られる　鬼遊
ぼんやりと明日の私が笑ってる　滋雀
ぼんやりと喋ってうまく急所突き　儀一
金がないから一日ぼんやりし　与史
ぼんやりを夫婦共々かばいあい　吸江
ぼんやりとしてる暇なし歳の暮　瓢太
十二月ぼんやりするなと叱られる　牧人
ぼんやりを叱り誕生日を忘れ　冬二
ぼんやりと今日は演技をしてやろう　智子
ぼんやりと見る蓑虫が動かない　眉水
ぼんやりに同僚みんな借があり　静馬

連休へぼんやり見てる昼の月　葛城
ぼんやりも混って家系の角が取れ　漫柳
女がぼんやりする時恋してる　一三夫
ぼんやりとボルノ看板見てる背な　形水
ぼんやりとする時の無い子沢山　綾女
ぼんやりと見せてきびしい嘘をつき　生々庵
ぼんやりと胸にこたえる皮肉言う　文秋
橋の上ぼんやり歩く十二月　形水
ぼんやりと雲の流れを見る失意　肖二
ぼんやりと落葉と語る日の孤独　君子
ぼんやりと背を師走の風が押す　肖二
ぼんやりとしてます猫と遊んでます　芳川

兼題「串」　**香川　酔々選**

串の数読んでのんびり飲み続け　季賛
釣ったのを民宿器用に串にさし　登美也
串焼きの鯛こんがりと膳につき　祥月
祝い鯛刺されめでたい日へ焼かれ　芳子
串ざしにされて名所の皿に乗り　正朗
串の数ごまかしながら酔うたふり　亜鈍
串干して昼寝の足がのぞかれる　柳信
串カツが文学論をふりかざす　静歩
串カツの串喰べられる程揚り　弘生
串かつの屋台で嘘の無い話　右近
終電を待つ連れがあり串カツ屋　芳川
下戸は下戸なりうまい串団子　誓二
串カツをむさぼりストを批判する　吸江
田楽の青竹串が香を添えて　多久志
玉串を捧げる顔をととのえる　好一
お重ねに載って串柿安堵する　肖二
銀の串ここはホテルのバーベキュー　多久志
商売は落した串も見逃がさず　柳宏子
へべれけになって串カツ数えとり　静歩
串カツで酔える男で働き手　寿美子
突きさして串は我が意を得たごとく　凡九郎
串ダンゴくわえて歩く旅心　花梢
串の数合わぬが幹事払わされ　敏
串団子の家族に別れいつかある　美幸
煮つめられ串もおでんの香に染まり　滋雀
玉串奉奠あとの金繰り考えず　小松園
魚串に鯛はポーズをとらされる　文秋
地下足袋で串踏んでいる新世界　岳人
ネギの串だけで二合がちゃんと空き　日満
賃満の手で串カツの串を抜く　与史
鉄の串人が殺せぬことはない　冬二
串ざしを頬張り紳士にはなれぬ　君子
串かつのぬくさに嘘はないだろう　冬二
串柿の甘さとなって雪が来る　牧人
望郷や串カツの肉硬ければ　酔々

兼題「肝っ玉」　**児島与呂志選**

底辺に馴れ肝っ玉太く居る　紫香
この顔であんな啖呵の肝っ玉　漫柳
急ブレーキ肝っ玉なくなった　敏
小金貯め肝っ玉小さく世渡りし　蘭
蜻蛉の軽い軽い肝っ玉　道夫
温厚な男の底の肝っ玉　潮花
弱腰の後押す妻の肝っ玉　右近
肝っ玉ないので歩巾変えられぬ　美幸
ライバルへまともに向う肝っ玉　肖二
捨て猫の肝っ玉そのまま寝てしまう　水客
叛かれた子の肝っ玉頼母しく　多久志
金のない男にでかい肝っ玉　鬼遊
肝っ玉の大小其の場で使い分け　一栄
隙だらけの男は肝っ玉を抱く　滋雀
弾丸の下をくぐった肝っ玉形水　
風采で見分けられない肝っ玉　頂留子
追いこまれ意外な妻の肝っ玉　としよ
肝っ玉財布の中でアクビする　夕花
お人好し笑顔に隠す肝っ玉　与呂志

兼題「傾く」　**岩本雀踊子選**

傾いた心へ釘を打ちつける　柳信
人間が傾き過ぎて容れられず　正朗
傾いたままでラッシュに運ばれる　どんたく
標的が傾いていてよく当る　日満
正論に傾く父の性が好き　日満

川柳ゆーもあ特集

無作意だ素朴だ
　などと耳学問
イミテーションだいや
　仁清だ人の壺

岡山県　岡村久志良

傾けて鍋の底かく子沢山　寿美子
傾けばインクのしみが広がるよ　古啓
陽が西に傾き余白慌て出し　失名
傾いた女心へ火をつける　あいき
傾いた月へ未練のある別れ　与史
ふすまは正直傾きへ妥協せず　文秋
傾いたまま昇ってる孫のタコ　三十四
公平である新聞の左寄り　形水
芯のある男は心傾かず　好一
鍵っ子へ傾く夕日もひとりぼち　としよ
傾きが直角となる女史のペン　道夫
標識が傾むいたまま山は雪　潮花
傾いていくため息を見抜かれる　花梢
おんなも男も傾くものを持って逢う　一三夫
傾ける耳に悪魔の声もする　冬二
愛がつらくて少し傾くやじろべえ　維久子
傾いたままでひとりの独楽まわす　花梢
あるゆとり妻に傾いてやろうかな　小松園
金廻り傾く月に急がされ　小松園
定年や河童の皿の傾けり　鬼遊
傾いたドームに戦争まだ残る　美幸
或る日ふと不善へ心傾ける　好一
傾いた花一輪が話しかけ　鎮彦
落日へ傾くままの影法師　静歩
出来心傾く月がつきささり　小松園
凧の糸傾く夕陽追いかける　水客
傾きそうになるから海を見に行こう　冬二
愛情が子に傾いている平和　武雄
少し傾く女の演技が可愛ゆくなる　雀踊子

兼題「織る」　正本　水客選

青い目に織られて京の文化財　弘生
その母の織り機もおいて記念館　日満
はた織機民具ブームで売れてゆき　正朗
明治百年亡母の手織の端切れ見る　一栄
ファッションの豪華さ早い秋を織る　芳子
嫁ぐ日の土産にしたいツムギ織り　与史
機を織るリズム故郷へ来た安堵　文秋
行詰り織機の錆が瞳にしみる　儀一
色糸がは入り国旗になれん生地　一舟
幸薄い女が織った曼陀羅で　肖二
鶴の織る布に哀しい彩がある　美幸
初詣で錦織りなす石だたみ　儀一
木の間洩る陽の幾条が朝を織る　一三夫
終幕を飾る緞帳織っている　智子
望郷のここも絹織る機の音　冬二
こんな家で西陣織るとは思われず　吸江
無形文化財と言われてもなお織りつづけ　瓢太
織り上げた紬を一夜抱いて寝るとしよ　織る音がしみじみ京を更けさせる　紫香
外は雪織娘の裾が冷えてくる　潮花
滝の水四季それぞれを織る流れ　岳人
啄木の詩が心に冬を織る　優
織りためて織りためて恙なし　生々庵
つづれ織るわが手の爪を櫛として　寿美子
機織れば赤字遊べば尚赤字　一二三
縦糸に合わせる糸を男選る　凡九郎
人間模様神のプランで織りあがる　幸生
機を織る老婆に檜山などはない　一三夫
母の織る紬じんじん雪になる　美幸
夕鶴ひとり羽の痛みを織り急ぐ　冬二
紬織る音と暮して島を出ず　水客

（河井庸佑整理）

雅号ぶっちゃけばなし　(146)

すいしゃ　よしだ



吉田水車

川柳雑誌入門当時は私の本名二郎を二朗として、句会に出て入選の際ジロウと名乗ったら山雨楼さんからジロウとは誰だ！とやや語気荒くたずねられた。考えてみれば音でいけば路郎先生と同じであるから、これはまずいと思ったので、別に改号をすすめられた訳ではなかったが水車と改めて、路郎先生にお見せしたらそれでよかろうとのことであったので以来―昭和六年頃から―今日まで来ている。号の由来とてはないが、強いて申せば、田畑の潅漑用の足踏み水車から独り米つく水車さては何千万キロワットの発電水車等々なかなか乙なのと独り合点でいるような訳である。

会社員　七十二歳



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

菜の花句会

高杉　鬼遊報

情をかけてなさけの重さ知る　サヨ
落書の隣りに落書画いて見る　悦郎
普段着のダイヤを安く見積られ　洋子
情ある席譲られてよろけたる　鹿蔵
めぐり逢う運命線が騒いでる　弥生
見積りは確かで円型ビルが建つ　酔々
同情が恋に変って行く時計　史葉
落書に丁度手頃な寺の塀　信男
ライバルに押されて戻る見積書　文子
癖の無い貌へ漫画家腕を組み　幸生
夫婦して情のもろさ笑い合う　美代
見積ればいのちへうすい札の束　十止庵
義理人情昭和五〇年素通りす　鶴声
騒ぐから馬鹿な男の顔になる　雀踊子
落書きにほんとの心が捨ててある　美幸
職責に殉じて情けに遠くいる　頂留子
トタン屋根灼けると騒ぐ西成区　鬼遊
他人様の土地を見積る癖をもち　紀美代
一騒ぎおさまる頃に値が上り　白風
落書きに母は大きな眼に画かれ　鎮彦

堺・若芽合同句会

和海　草春報

澄みわたるこの湖に何が居る　利一郎
澄む海の底へ自信の海女の芸　祥月

写経する一字ごと欲を消し　一二三
澄んだ瞳で園児は痛いとこをつき　天笑
聞き上手的はずれにも驚かず　柳信
ほろ酔いの射的人形へ意地になり　儀一
指名から好きな女は外しとき　笑痴
的はずれ話どんどん進んでる　千万子
わざと的外して本音たしかめる　小松園
さて借るとなると条件云ひならべ　徳子
条件をつけてきっぱり諦める　つき子
悪条件だまってプロは受けて立ち　一舟
世の中の不景気知ってる貯金箱　柳影
小箱程の家やすらぎがあって　鎮彦
愛の小箱女はひそと抱くさだめ　宏子
希望とは程遠かった暮し向き　清女
御希望に添えず履歴書又返り　摩天郎

ハワイウイロー社

市川　暁舟報

お百度もどうせ迷信無駄と知り　紅渓
騙されて無駄と知りつつ買ってゆき　桐雄
無駄話たのしく暮らすマクレ組　秀山
無駄でない親の意見に任かせとき　公女
無駄づかいしても困らぬお役人　拝山
無駄のない暮らしへなんの物価高　万里歩
あれも無駄これもムダ物価高へ挑む　一つ葉
公害の処理出来ぬまま無駄に税　小雪
無駄多き道を歩いて数十年　峰円
浪費も楽し老いのひとり旅　
削られた送金に無駄使いひきしめる　蒼蛇楼
無駄骨も修業の一つ諦らめる　草海
長生きが取り得ムダ飯食いつぶし　風影
暴走へ犠打の策戦無駄となり　河舟
老婆心無駄と知りつつ娘を諭し　北海
妻の知恵無駄から産んだ貯金帳　彩珉
無駄すなという父親の喫煙量　暁舟
風鈴の無駄を忘れた音で生き　三石
転落へ親の意見が無駄になる　雪女
無駄口を云わぬと一人嘆ってる　伯山
回わり道無駄でなかった今日の地位　

川柳たけはら

森井　菁居報

黙禱を捧げ還れたのが不思議　静水
秋の虫ふっと老後を思わしむ　房子
ライバルに負けっぱなしでいる拳　蘭幸
恩給の余生を崩す物価高　凡女
苦心した名だぞ父さんのプレゼント　文晴
どうもがいてみても父娘の血　寛子
全身で笑う若さが素晴しい　かつ子
美しい指美しい絵が画けず　不朽
順番でない末っ子世話になり　扇水
逃くる夏へドラマは波の色を替え　紫光
クーラーはなくとも夏が過ぎてゆく　そのみ
エレクトーンてんしのような音がする　愛
天寿まっとう僅かな保険金で良し　菁居
学生気分ではすまない半年過ぎる　千代美
住み馴れた町で保証人がない　貞子
ひとり旅向いもひとり旅らしく　英詩
ネックレスにされる十勝の石の艶　美佐雄
にんげんをいじめる核はいりませぬ　のばら
石に戻る墓石に雨が静かなり　一路
板前の腕へうなぎの素直なり　スミ子
欠伸してうつる家族がいてくれる　酉合

どんぐり川柳会

谷垣　史好報

裁くもの裁かれる者　眼を交し　いわを
千金で昨日と今日は換えられぬ　美幸
人間を裁く法衣は黒くなり　鬼遊
資本家を裁いて魚は死んでみせ　酔々
逆転の明日を信じて慌てない　弥生
気の長い裁き役所を相手どり　一二三
パパの持つエンジン酒がきれてスト　喜風
よその花盗んで花に裁かれる　サヨ
多数決その裁決にある不服　儀一
エンジンが欲しく木馬もう鳴かぬ　岳人

裁かれるのに座布団が敷いてある　薫風
エンジンのかからぬ顔で遅刻する　史好

川柳わかやま　太茂津報

肚の底見せぬ演技が喋りすぎ　幸
葛藤を写して鏡静かなり　マサ子
ほほえみは矢張り鏡も好きらしい　武雄
嘘ついた夜の鏡は歪んでる　太茂津
他人には見せぬ涙を拭く鏡　冨江
いらだちを鏡に向けて自問する　京子
逢うときはもうこれきりとゆれる恋　和子
恋敵素知らぬ顔の探り合い　寿子
若い気でいても鏡は化かせない　福水
大海原を恋の海として悔いず　与史
三面鏡を閉じてから化粧がはじまる　道夫
恋日記あの日のままの血がのぼり　ふみよ
五十坂まだ恋の夢追う女　晶子
鏡など見向かず寡婦の頬かぶり　元一
底知れた奴と笑っているゆとり　佐知子
恥かしいうちはまだまだ距離がある　嘉之
鏡台に向って女取りもどす　千寿子
見解の相違恥とは思うてず　きみ
底辺であえぐ彼等に明日はなし　喜誉司
ひび割れた鏡へ未練なお残り　那智子

南海電鉄川柳会（大阪市）辻　圭水報

半年は床で寝てたという日記　摩天郎
半年の病欠僕の机の位置がなし　季賛
半年の違い先輩顔でいる　宏子
半年の空白こうもほっとかれ　圭水
判一つ押して半年しばられる　千万子
人生の半年ボーナスで区切り　鎮彦
半年目そろそろ女ヒゲが生え　柳信
あてもなく半年期限で金を借り　昌女
楽しさに過ぎた半年夢のよう　儀一
半年を失業保険に保証され　綾女
サービスの半年テレビ故障せず　十止庵
新築へ半年指を折り返えし　正彰
半年で芸能人はもう別れ　肖二
半年で流産した子の年令数え　和郎
別れると口には出せど後髪　誓二

南大阪川柳会　金井文秋報

ナイターが済んで満月見上げられ　十止庵
納涼で来たナイターに熱を入れ　文秋
ポークカツと出ずトンカツといったまい　古方
お頭つき嫌う子トンカツにした祝い　正彰
子が歩き出してサボテン置きかえる　滋雀
サボテンの植え替えトゲに悩まされ　綾女
大仰な保身でサボテン身構える　凡九郎
花咲いてやっとサボテン好きになり　あいき
家元もまだサボテンは活けて見ず　柳志
メリハリにまだ八十と云うゆとり　一舟
メリハリをつければ人形らしくなる　頂留子
メリハリへ女は爪を赤くする　鎮彦
メリハリのない善人は細く生き　千万子
メリハリの効いた地声で叱られる　智子
遺影もうピンボケになる涙　好郎
キザだけが目立ち取柄のない男　蘭
もっさりしたくらしにキザな子が生れ　小松園
真実もキザとみられているタイプ　恒明
イミテーション光るダイオのキザな指　好一
惚れた目にキザがイカしてるように見え　弘生

川柳東大阪　竹中肖二報

慾のない男で割り切るのも早い　度
すんなりと割り切る若さうらやまし　好一
割り切って女泣かない石となり　右近
職業と割り切ってますストリップ　三十四
全没もよい勉強と割り切って　良教
愛情を割り切り夫婦ひびが入り　喜風
割り切って男の玩具になっている　肖二
割り切ると涙が惜しくなってくる　十止庵
割り切った心に住んでいた嫉妬　雀踊子

佳句地10選（前月号から）

大坂形水選

徐行運転うしろに父母をのせている　十止庵
出土品つなげば過去をしゃべり出す　君子
我慢しているのか妻が唄ってる　澄子
低気圧着物の話少しする　克枝
背伸びする女の嘘はゆれている　柳信
時計から解放された日のごろ寝　博泉
寝顔つくづく性善説を信じよう　太茂津
前進へ運ぶ役目を買って出る　季賛
毒舌が出そうで廻転椅子まわし　孤呂二
言い訳ばかりしている暑い日が続く　蘭幸

金魚すくい父子とおなじ年令にする　美子
カルキ水金魚は舞いを忘れない　正彰
パトロンに値はふっかけてある金魚　恒明
お家騒動金魚は毒を飲まされる　愛論
金魚にも珍種ここにも前衛派　凡九郎
送り火の習慣団地に来て忘れ　綾女
それだけの余裕があったので動き　古方
いささかの余裕があって善意の灯　柳宏子
ナイターのビールが悪い野次にする　鎮彦
失業の腕に自信のある余裕　儀一
昼の燈台ヌーボーと立っている　文秋

岸和田川柳会　植山武助報

秋晴れの音にさまされ朝の味　有雅
戦友の夢おろかなる世をなげき　佳生

うそついた眼がだんだんと下を向き　葛城
帯きつく締めて秘密を抱きつづけ　露子
雨降りの客信用が呼ぶ有難さ　加仙
信用が苦しい老舗の物価高　武助
信じているから娘一人旅に出し　裕子
酔うて帰る度に灰皿増えてくる　香珠夫
寝言だと思ってみても腹が立ち　千代
寝言まで泣きじゃくってる児の寝顔　静芳
囚人の寝言しきりに詫びている　白光子
老夫婦妻の寝言をゆり起し　操子

川柳たましま　稲田豊作報

羨望の中で重荷に耐えている　扇水
押し勝ったとき人情を置き忘れ　千翁
忠犬が死んで鎖を外される　豊作
嫁入りの一の道具が荷にならぬ　流風
妻が押す荷車唄が乗せてある　林鶴
いさかいの妻はゆっくり荷をまとめ　朝二
ご破算で願えば引くものだけ残り　八笑人
人徳の重みで押しが効いてくる　誠一

からくりの糸を引いてる資本主義　蕨草
尾を振る犬へやる物がない安定所　安静
交代をして見てなるほど重い荷だ　三辛堂
食べ過ぎで貧しさ忘れる恋女房　静海
身に覚えない野良犬として怒り　梁水
三度目の念を押されて気が変り　慶子
のれんに腕押しそんな妻で平和です　秀子
すりよってすりよって来て犬の知恵　民恵
好物は二つ目の胃に入るらし　よしを
くされ縁の尻っ尾が残り又逢うた　博子
アレルギー性そこでカルテが考える　里風

川柳高知　川竹松風報

綿菓子の匂いのなかにある銅貨　星雨
楽しさは嫁と並んだ台所　秀子
歯車が狂い時世に乗りおくれ　たけし
浮世ですイロハカルタの絵も変り　寛一
コーヒーを啜って熱帯魚と対話　恭一
汐時を出れば悪友ついて出る　井波
台風がくれた儲けのない仕事　孤舟

一分間の柳論

黒川紫香

まだ阪急電鉄に勤めていた頃、突然社長室に来いと云う秘書からの連絡で社長室に伺うと、当時の和田社長がにこやかに笑いながら「君、こんなものはどうだろう」と出されたメモを拝見すると、

――風去りて亡妻の残した菊の花

と一句書かれてありました。はじめての作句だとのお話しでしたが、先き頃奥さんを亡くされた社長のお気持がじーいんとにじみ出ているようで、ただ「結構です」と云ったまま引き下りましたが将棋は素人名人だと云われた社長にこんな句が生まれるとは思いませんでしたが、句の良し悪し、経験の多少にかかわらず実感と云うものが如何に強く句に作用すると云う事をしみじみと感じました。

勿論、私等の句集「三人」を買っていただいておりました。

残暑もう秋を知ってる花が咲き　十面子
台風を叱り残暑に布団乾す　百日紅
年上に乗り廻される三輪車　豊栄
追い抜いて母を見返る三輪車　其梅
飛び出しも平気な顔の三輪車　紀人
足やっと届き三輪守りが押し　勝子
変人の作った服が崩れない　桂緑
変人の立派なヒゲも村八分　鹿絃
変人の名で職人の腕が映え　一二三
変人と言われた老画家一人住み　海州
自他共に許す変人親しまれ　芽十
母の死へ変人やっぱり出す涙　松風

川柳大阪　児島与呂志報

閉店やのに粘られる縄のれん　笑風
金を返して此れから対等に云う立場　六竜子
親の顔見たしベンチの二人連れ　漁人
一応は返金又すぐ借りる肚　雅巣
もう一杯欲しいのんは外される　敏
免状の家元印が威厳増し　呑歩利
三味の音に我が身の老いと秋を知る　京介
手のとどくところに罪な柿が熟れ　酔升
静けさの中に見つけた日の平和　良人
泣き上戸笑い上戸に励され　徳松
宗匠の献茶静かに湯がたぎる　武松
札束が降ってベンチの夢が覚め　本蔭棒
ちぎれ雲秋の孤独を知るベンチ　胡蝶
閉店も近づきパートの乳房張り　秀峰
閉店をしても自販機稼がされ　重人
人生の縮図ベンチは知っていた　洛酔
見合ではしとやか今では尻に敷く　眉水
うさ晴らし聞いた屋台の灯を閉じる　道子
断絶の静かな部屋が気にかかり　与呂志

城北明朗句会　川口弘生報

泣く孫の五分の魂もてあまし　芳子
沈没の仲間を朝寝して思い　小路

お日様はご存じなくも日照権
善人と言われ流れに逆らわず
議事進行馴合い通り決となり
なにか有るなと立止る白い杖
ライバルへ妬心難癖つけたがり
撫で肩に自負を集めて舞い納め
あきらめているのに涙あふれて来
母親の涙で心入れ替える
名も聞かず心残した旅の女
左遷など気にせず島に住み馴れる
泣かすのも運動と夫婦さしむかい
魂胆があってねんごろに声をかけ
敬老の日歩け歩けと草履受け
靴ベラのキッス素直な靴にする
失意の日縄のれんまでからんで来

つね道子
三十四
正朗
百酒
太茂津
柳信
牧人
晉二
ますえ
繁子
炉香
秀村
弘生
右近

むらくも川柳会　小砂

お祭りへ家族を出して飲みなおし
家族連れ運動会が帰って来
雑草も種族絶やさぬ実をはいて
黄金の匂う実りへ陽がまぶし
台風も外れて確かに秋実る
大胆なポーズで売れる週刊誌
愛犬も家族並みでともてなされ
老いの趣味家族よろこぶ牛を飼い
Uターン家族揃った笑い満つ
叙勲沙汰父は草葉の蔭で笑み
朗報に電話のベルもはずんでる
レントゲンガンでなかった通知抱く
朗報へ母の祝詞が泣いて来る
売りことば買わず女系の家族愛
稲刈機秋の実りを這い曲り
実るものみな実らせて山の秋
核家族それもいいなと思うとき
家族団らん茶の間は孫を中にして
生き生きと朗報電光板を走る

白汀報
千草
敏明
澄水
孝華
福子
幹伸
とみ子
湖楽
蓮露
巡歩
祥月
早苗
文子
大鳥
秀子
明朗
白汀

川柳ささやま　河原みのる報

遠き日を偲べば母の匂いする
十月の菊から菊として匂う
刑事もう汚職の匂い嗅いでいた
奥さんがリードしては名は内助
リードする姑追い越さぬ距離に住み
抵抗へメス狼が指揮をとり
絹ずれの音もこいしく袷着る
棺の釘別れの音へ目を閉じる
病棟の夜半秒針胸を刺す
歩けぬ身音だけで知る花火待ち
不思議ですなあと実力見下げられ
訪れる客にときめく適令期
妻の留守こうまで人が訪ねて来

喜美代
みのる
無鬼
近江
とんぼ
緑村
久子
百合子
与志
よしの
可住
素水
初音

京都塔の会　松川　杜的報

鈍行へふたりの話題を積んでいる
なんでもない話を根掘り葉掘りされ
挨拶へぶっきら棒な外科の女医
樟脳の匂う衣裳が噂撒く
人の世のわな作り出す原稿紙
贋崖仏一字埋めて滝にぬれ
虫の音を残し次々灯が消える
病気には負けてはおれぬプラン立て
ほなぶ潰でもと愛想だけの京
京の寺枯葉の中に暮れてゆき
枯葉焚く下の湿りを秋という
てれくさい愛情と云おうか父と子の

明代
求女
紫香
誠史
王石
笛珠
潮花
季賛
蘇堂
飛鳥
水客
杜的

駒つなぎ句会（大阪市）　岸　南柳報

テストが80点でわたしはまんぞくだ
欲張りの満足感は貯める事
ちぐはぐな話も笑顔で聞いてやり
ちぐはぐにボタンを止める幼い手
屋根裏に住んだ苦労も発表し
むずかしい六法もある裏表
裏街道遂につまった表沙汰

弘子
鎮彦
南柳
茂子
祇風
儀一
正彰

みぞおちを押え娘は笑いこけ
男のみぞおち胸毛を威張らせる
みぞおちに貴方の心がさわってる
みぞおちをついてすねる夜の長さ
みぞおちがここにあるなと酒の味
みぞおちが痛くなるほど気をつかい
税務署でみぞおち固い芯が出来
みぞおちがキリキリ痛む記事ばかり
みぞおちが痛くなるほどすがりつき
あきらめの日のみぞおちが痛み出し
みぞおちというスロープのよい谷間
人形のみぞおち悲しみ秘めている
みぞおちに触れたが狂い始めなり

綾女
誓二
善信
柳信
摩天郎
宏子
はやを
肖二
勉
美代
恭太
育園
小松園

和歌山七面句会　中筋　三幸報

今日も亦くらしをつなぐ笛を吹く
隠居部屋テレビも癖を持っている
政治家の耳は難聴かも知れず
酒癖がそろそろ握手しはじめた

幸
淳子
冨子
太茂津

大仏の耳たぶにいて大掃除　光治
老いて尚笛に未練の秋祭り　寿子
耳寄りな話しの隅の謎ひとつ　武雄
病状はドイツ語なのに耳を立て　澄子
ベランダに九月乙女の笛を吹く　其夕
両耳を押える話十八九　勇次
相談に乗るというのに耳貸さず　宏明
地獄耳素知らぬ顔で受け答え　利幸
草笛の上手な少年足を患み　三
虹川柳倶楽部（唐津市）新岡回天子報
素晴らしい夜景貧しい灯もまじり　照沖
田を掘って小判ザクザク競艇場　広坊
唐津市をさえてボート人気呼ぶ　実
生と死と背中合わせの看護室　勝一
飛んで散るススキの穂へも冬が来る　朴竜
縁談に娘心がみくじ引き　一竿
四十でも起てず職安世話になり　久隆
新足袋をはいて綺麗に舞い納め　春吉
年寄りの道には険しバラス道　釜志郎
満月へススキ揺れてる川原道　一三
特技ある為に社員にうらやまれ　新一
発電所漁業補償も背おい込み　三男
汗が飛ぶ砂が飛ぶ浜狂い獅子　虹汀
8ミリにして新婚を祝うて呉れ　回天子
三井が丘川柳会　高田　博泉報
思春期の子供の心読めぬ親　てまり
読む程に怒り覚える政治欄　正子
雨さえもしのぐ傘もない浮浪人　草生

・ペンペン草・

昇竜の年

★アレもコレも上がる、本誌の購読料も上がる。竜は昇らなかったが物価だけ上がったでは何をかいわんやだ。

前田勇氏遺稿刊行記念

★昨年11月27日スト決行中の北御堂北側のグリル大樹で故前田勇先生の遺稿「上方まんざい八百年史」が、杉本書店の杉本字造氏の手で上梓され、刊行記念パーティが催されたが、川柳界にもこうした篤志家が現われるとありがたいのだが…。

★故前田勇先生（大阪学芸大学教授）は昭和47年6月1日に急逝されたが、先生は川柳にも関心を持っておられた。45年11月23日の大阪文化祭第22回川柳大会には先生に講演していただいたが、その日、講演を済ませた先生と、兼題最後の披講を待つ川柳文学の堀口塊人先生とぼくが、ガランとした選者控え室で歓談する機会を得た。塊人先生は話題をうまく寄席演芸へ持っていかれ、前田先生には落語、（先生はNHKの落語研究会の顧問を故岸本水府先生と共にしておられた）ぼくには漫才だったが、もっぱら前田先生に落語に出てくる古川柳などに話題が集中した。まことに得難いひとときであった。

★先生のこの刊行記念パーティは、文士、画家、書店主、芸能人の一流どころがズラリ、豪華版だった。

本年もよろしく

★合本が11冊目に挑んだ。本年も皆さんのご指導を仰ぐのだが、可動・葉子夫妻にも助けてもらわねばならない。よろしく頼ンます。

（不二田一三夫）

▼葉子コーナー

▼明けましておめでとうございます。今年は中島先生ご夫妻や不二田様の句集が出版されますので私の回わりは華やかな年になりそうです。

各地柳壇賞は4月号で発表

手筋読み切れず煙草で焦がす指　一蕾
おみくじへ祈りをこめて読んでみる　亜也子
客寄せに立読みの本も置いてあり　三郎
弁当もなかなか高くつくおかず　琴音
下積みに堪えて他人のこころ読む　三千子
駈けてゆく子を呼びとめて傘に入れ　水声
寿しづめに傘のしずくをどこへやろ　博泉
予報どうあろうと母は傘を持ち　〆女
傘ひらくパチンコ玉がころげ出る　度
恩師の碑建てる傘下の仲間たち　世山
背のびして傘差し掛ける伸びた子に　公子
置傘の善意だんだんもぎとられ　柳宏子
天の邪鬼傘を持たずに雨に入る　亜鈍
名匠も紅葉を賞でて傘忘る　二松
駅弁の箸止めさせる海が見え　鬼遊
弁当をひらくと鹿が寄ってくる　牧人
弁当の楽しさ知らぬ給食児　形水
テレビの通りにすると高くつく弁当　入仙
オーエスケー川柳会　大坂　形水報
簡単に電話電報で義理をたて　一念
苦しみは随筆にして忘れた気　秀川
真心の祝電船出を勇気づけ　博泉
お座敷へ上げてから悔む長い尻　千夢
雛段が似合う座敷が無い団地　みどり
二階借り日陰で育てる福寿草　岳麓
猫ぎらい育てるうちに情がわき　亜世子
座敷から手を叩くのも旧家　聖地
電報と電話にハネムーン眠られず　前田
悪友の祝電僕にだけ通じ　亜成
随筆の細道今日は彼女つれ　一扇
祝電の女名前があとをひき　栄生
女坂残り火抱いて読む随筆　弥形水
随筆が好きで文芸春秋読む　入仙
金にならない随筆書いている生活　好郎
祝電と弔電打っておくゴルフ

本社新春句会

日時　一月七日（水）午後六時
会場　大阪府中小企業文化会館（二階二十一号室）
天王寺区上汐町五丁目二五番地・地下鉄谷町九丁目下車南三百米・電話七七一―四〇九六
あいさつ　中島生々庵
柳話　川村好郎

☆短冊交換会（一人三点以内）
■☆五十年度月間賞杯授与と全出席者表彰

兼題　「初日の出」若本多久志選
「羽根」菊沢小松園選
「竜」西尾栞選
「坂」中島生々庵選

席題　二題当日発表
各題三句以内厳守
会費　三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

2月の兼題　「神楽」「放談」「身綺麗」「情」

2月句会は6日（金）
3月句会は8日（月）

・一般購読料改正・

耐えるだけ耐えてきましたが、それも限界にきましたので、本号より本誌一部三百五十円に改正させていただきます。ご諒承のほど、よろしくお願い申しあげます。

・お願い・

ご送金は早目にお願いいたします。会費が切れますと休会とみなし送本を中止いたします。

川柳塔社

・募集・

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「白酒」竹中綾女選
「耳」仲どんたく選
「電気」福田丁路選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

四月号発表（2月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）北川春巣選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「新入社」宮口笛生選
「スピーチ」松川杜的選
「四月バカ」黒川紫香選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

12月号は11月28日発送しました

定価　三百五十円（送料十六円）
半年分　二千百九十円（送料共）
一年分　四千二百円（送料共）
昭和五十年十二月二十五日印刷
昭和五十一年一月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　藤原童心社
郵便番号　542
発行所　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

乗用車専門販売店

NISSAN

尼崎日産自動車株式会社

取締役会長 若本真彦

〒661 尼崎市尼浜町2丁目3番27号 電話(06)429—5861(大代)

事業所名	郵便番号	所在地	電話番号
尼崎営業所	(661)	尼崎市尼浜町2—3—27	大阪(06)429—5861(大代)
尼崎中古車ギャラリー	(661)	尼崎市大西町3—8—20	大阪(06)426—3751(代)
伊丹中古車ギャラリー	(664)	伊丹市千僧2—6	伊丹(0727)79—3961(代)
宝塚営業所	(665)	宝塚市旭町3—2—6	宝塚(0797)84—2300(代)
西宮営業所	(663)	西宮市下大市東町11	西宮(0798)52、1121(代)
西宮中古車ギャラリー	(663)	西宮市若山町78—1	西宮(0798)65—3963(代)
神戸営業所	(653)	神戸市長田区2番町4—2—1	神戸(078)577—0223(代)
西脇出張所	(677)	西脇市寺内492—1	西脇(07952)2—4152(代)
淡路出張所	(656)	洲本市下加茂1-1-86	洲本(07992)2—7353(代)
垂水出張所	(673)	神戸市垂水区伊川谷有久	伊川谷(0789)74—2781(代)
神戸サービス工場	(652)	神戸市兵庫区小河通8—5—2	神戸(078)575—5256(代)
灘中古車ギャラリー	(657)	神戸市灘区岸地通5—3	神戸(078)801—5111(代)
明石営業所	(673)	明石市船上硯町2—1—10	明石(078)923—0234(代)
篠山営業所	(669-21)	多紀郡丹南町牛ケ瀬29	丹南(07959)4—1171(代)
篠山中古車センター	(669-23)	多紀郡篠山町郡家田中の坪842	篠山(07955)2—0603(代)
姫路営業所	(671-02)	姫路市御国野町国分寺56—1	姫路(0792)52—4181(代)
三田営業所	(669-13)	三田市新士1610—1	三田(07956)2—6501(代)
加古川営業所	(675-01)	加古川市平岡町高畑537—1	加古川(0794)23—3144(代)

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚饅
焼売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅



大阪・なんば

蓬莱

TEL 641 0551 -2

551

<出張店> なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十一年十二月二十五日印刷
昭和五十二年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五八四号

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は　日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む　有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線　学園前駅すぐ

近鉄





一番よい酒
うまい酒

清酒
菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影

定価　三百五十円
（本号に限り送料二十円）